

京都女子大学図書館所蔵『方丈記』 伝藤田友閑筆写本

——松花堂にあった不純本文の片鱗——

中 前 正 志
梶 山 柚 輝

京都女子大学図書館が所蔵する『方丈記』の写本・版本計二十三点については、中前編『東山中世文学論纂』（私家版、平26）に「略目録稿」を掲載し概要を提示するとともに、同書のほか本誌誌上および京都女子大学大学院文学研究科研究紀要『国文論藻』誌上において、各伝本を個別に取り上げ若干の検討や紹介を細々と行ってきた。今回取り上げようとするのは、右「略目録稿」にて⑤の番号を付し、「伝藤田友閑筆写本」と称しておいたものである（請求記号KN914.42/Ka41 資料ID 0002700573）。その基本的な書誌事項を、右の「略目録稿」には、次の通り記しておいた。

江戸前期写。袋綴（朝鮮綴）。一冊。縦二七・〇×横一九・三cm。表紙以外全二〇丁（うち前後遊紙各二丁）。黄土色地唐草文様絹表紙。見返しは金砂子散らし。楮紙。外題「鴨長明方丈記」（題簽に墨書）。内題「方丈記」。内題下に「鴨長明述」。一面十一行。漢字交り平仮名文。「月影は」歌あり。奥に「この方丈の記は摂州富田の里ノ

藤田彩雲翁友閑筆跡なり。……寛政六年丙寅南呂吉 八十翁白亭記之矣「不明陽刻朱正方印」。箱底に貼付の紙片に墨書「松花堂高弟／藤田友閑筆」。本文冒頭部に陽刻朱長方印「春城堂藏」。五大災厄記事を、○印を付して五段に分段して掲載する。

ここに一部のみ引用している奥書の全容については、後掲【翻刻】の末尾部参照。また、その内容をめぐって、後ほど若干の検討を加えることになろう。

*

右引「略目録稿」に、本文冒頭部に見える陽刻朱長方印（後掲【影印】参照）を「春城堂藏」としたのは、「香城堂藏」の誤りであった。ここに、訂正しておく。

また、本写本の伝来について、右「略目録稿」以降に判明した事実がある。まずは、その点、報告しておきたいと思う。

三井系の実業界で活躍し、茶人・茶道研究家としては箒庵の号で知られた、高橋義雄（二八六一～一九三七）という人物がいる。高橋は『萬象録』⁽¹⁾という日記を残しており、その大正八年九月六日条に、「藤田友閑齋の習字」という欄外見出しのもと、次のように記している。

一昨日強羅の益田孝氏方丈庵茶会の際、文机の上に飾りたる鴨長明方丈記は松花堂の高弟藤田友閑齋の筆なりと云ふ。^A 此友閑齋は摂州富田と云へる所に住みたる藤田彩雲即ち友閑齋の筆跡なるが、此人は高齡に至るまで筆道に疎かりしに、或る人が斯くては万事不便勝ちなるべしと言ひしを聞きて、今天下の能書は誰ならんと問ひし

に、八幡の松花堂なりと答へければ、夫れより毎日三里の道を三年間往復して只管筆道を学び、猶ほ怠らず修業する事二十年に至り、絵画の道にも通じ時に国風も詠じて、松花堂の後継とまで称せらるゝに至りたり云々。寛政六年八十翁白亭と云ふ人の奥書あり、近代に於ても大倉八郎翁が六十を越えて光悦風を習ひ大に成功せし例などあり、余も亦是れより書道を研究すべく思ひ立ちしに就ては、近日榊原鉄硯氏を訪ひて其意見を尋ね臨写すべき書風等も相談する考なり。

冒頭部によるに、「二昨日」すなわち九月四日に、箱根の「強羅」での「益田孝」主催の「方丈庵茶会」に臨席した、その際の見聞を端緒とした記述である。次に掲げる九月四日条の記事からは、高橋が確かに同日に同茶会に赴いたことが確認できる。「強羅の益田氏方丈庵」という欄外見出しのついた記事である。

午前十一時半、益田孝氏より出迎ひの自動車にて強羅の新茶室方丈庵に赴く。……相客は益田英作、野崎廣太、平田久なり。

両方の記事に出てくる益田孝（一八四八～一九三八）という人物は、三井物産を設立して初代社長に就任した実業家である。茶人としては鈍翁の号で名高く、また、蒐集家としても著名であった。益田孝と高橋義雄は、財閥においては三井を大きく発展させた上司と部下であり、茶の世界においては、先輩と後輩であるとともに盟友でもある。二人にはこのような交流があるため、益田の茶会に高橋が招かれるのは至極自然なことである。

茶会の会場となった強羅の方丈庵は、先引九月四日条の中略箇所^①に記述されていることだが、庵主の益田孝が「鴨長明の方丈記に拠り、丈室の構造より備品庭園の末に至るまで悉皆有りし昔の面影を写した」庵である。その再現の徹底ぶりは、高橋『東都茶会記』がより詳しく記しており、「日野山の方丈は七百年後に於て其儘強羅山に再現せり」と評している^②。

先引『萬象録』大正八年九月六日条の波線部によるに、その庵の文机に飾られていたのが、『方丈記』であった。長明の方丈庵を精密に模した庵にふさわしい趣向であると、庵主益田孝は考えたのだろう。波線部から実線部A～Dを経て破線部に至るまで、その『方丈記』について、高橋は記述しているようである。

『萬象録』の大正八年九月五日条、すなわち茶会の翌日の条には、

午前、昨日益田孝氏より借入れ来りたる方丈記及び鴨長明集上下を通読し、方丈記中入用の部を摘写し書状を添へて双方共に強羅なる益田氏別荘に返送せり。

という記事が見える。高橋は、「昨日」すなわち茶会の催された四日に、「益田孝」から「鴨長明集上下」とともに「方丈記」を借りていた。そして、五日の「午前」に、それらを通読し、「方丈記」の「入用の部を摘写」している。先に掲げた翌日・九月六日条の実線部から破線部に至る記事は、その摘写したものに基づいているのに違いあるまい。

さて、その九月六日条では、益田から借りた『方丈記』について、波線部がまず「鴨長明方丈記は松花堂の高弟藤田友閑斎の筆なり」と云ふ」と述べ、最後の破線部が「寛政六年八十翁白亭と云ふ人の奥書あり」と記している。特に注目されることには、破線部の方の記述が、小稿の取り上げる京都女子大学図書館所蔵『方丈記』伝藤田友閑筆写本（以下、「伝友閑筆本」）に、先掲「略目録稿」にも記載した通り「寛政六年丙寅南呂吉 八十翁白亭記之矣」（後掲【翻刻】369行）と末尾に記す奥書（354～369行）が存するのと、まさに符合している。そういえば、波線部が「鴨長明方丈記」と称するのも伝友閑筆本の外題「鴨長明方丈記」（先掲「略目録稿」所引）と、「松花堂の高弟藤田友閑斎の筆なり」とするのも同本の箱底貼付紙片墨書「松花堂高弟藤田友閑筆」（同上）と、悉く合致している。

そして、波線部と破線部に挟まれた実線部A～Dは、伝友閑筆本が有する「八十翁白亭記」という奥書の記述と、一致あるいは対応している。

まず、実線部Aは、伝友閑筆本奥書の冒頭の一文「この方丈の記は、摂州富田の里藤田彩雲翁友閑筆跡なり」(354〜355行)が筆跡の鑑定結果を記すのと、明らかに一致している。その一文にいくらか言葉を補った形になっているものの、「摂州富田」「藤田彩雲(翁)」「友閑(斎)」「筆跡」「なり(なる)」など、いちいち対応し一致している。実線部Aの冒頭の「此友閑斎は」は伝友閑筆本奥書の「この方丈の記は」と異なるが、それは直前の波線部末尾の記述「……藤田友閑斎の筆なりと云ふ」を受けようとしたために生じた相違と理解できよう。

続く実線部Bは、伝友閑筆本奥書が、右の冒頭の一文のあとに、

抑、翁は年老るまで筆の道を学はす。ある時、其令正諫て曰、旅行又他行なとのおりから事を欠らめ。くゆるとも及はし、との一言に迫りて、今より学ひても事業なるへきやといへは、なるもならぬも汝のこゝろなり。問ていふ、今、天下の能書は誰ならんや、と。(355〜362行)

と続けるのに相当しよう。友閑の悪筆を諫めた人物が、実線部Bでは「或る人」、伝友閑筆本では「令正」、その人物の諫言が、実線部Bでは「斯くては万事不便勝ちなるべし」、伝友閑筆本では「旅行又他行なとのおりから事を欠らめ。くゆるとも及はし」となっており、伝友閑筆本の方が人物や諫言の中身がより具体的に詳しく記述されている。また、伝友閑筆本の方にだけ、今から学んで成就するか否かについての問答が続けられている。そのように叙述のあり方の精粗という点などでのかなり大きな違いがいくつか見られるものの、友閑が高齢まで書道を学ばず人から悪筆を諫められたという概略は、共通する。そして、友閑からの問いかけである二重傍線部の「今天下の能書は誰ならんと問ひ」(『萬象録』)と「問ていふ、今、天下の能書は誰ならんや、と」(伝友閑筆本)においては、表現に至るまでほぼ完全に一致している。

実線部Cは、伝友閑筆本奥書が、右の二重傍線部に続いて、

そのころ、南山松花堂いましぬ。三里の遠を日々往来し、三年の間まなひし。かくて、初終二十年の修行怠らす。後、絵かく事までも学ひ、又、哥を詠し、

(362～366行)

と記すのと、大きな差異なく、盛られた要素が悉く対応し一致している。実線部Cが、先の二重傍線部の問いかけに「八幡の松花堂なりと答へければ」と明確に回答を示す形になっているのに対し、右奥書は必ずしもそうなっていないが、「南山」は「八幡」を指す呼称でもあって、「八幡の松花堂」(『萬象録』)と「南山松花堂」(伝友閑筆本)が対応し、ともに松花堂昭乗を指すに違いない。そのあとも、「毎日三里の道を三年間往復して」「学び」(『萬象録』)に対して「三里の遠を日々往来し、三年の間まなひ」(伝友閑筆本)、「怠らず修業する事二十年」(『萬象録』)に対して「初終二十年の修行怠らす」(伝友閑筆本)、「絵画の道にも通じ時に国風も詠じて」(『萬象録』)に対して「絵かく事までも学ひ、又、哥を詠し」(伝友閑筆本)と、実線部Cの「国風」が伝友閑筆本では同義語の「哥」となっているなど表現や言い回しに細かな違いはあるが、すべて対応している。

実線部D「松花堂の後継とまで称せらるゝに至りたり」は、伝友閑筆本が右引部「……又、哥を詠し、」に続けて記述する「後の世の手本となりぬ」(366行)と、完全に一致しているわけでなくずれてはいるが、対応する内容であるには違いなくて、後に友閑の筆が重んじられたという点では共通している。

以上のように両者の記述を一つ一つ確認するに、全く同文になっているというわけではないものの、内容の概略が全体的に共通するばかりか、記述された各要素が悉く対応しているのが随所に認められたり、ほぼ完全な表現上の一致が見られたりもするのである。先述通り波線部や破線部が符合・対応することに加えて、右に確認したことを勘案するならば、『萬象録』大正八年九月六日条の実線部あるいは破線部が、他ならない京都女子大学図書館所蔵の伝友閑筆本の奥書によって記述したものであること、明らかであろう。すなわち、高橋が益田から借りてきたのは、同本そ

のものであるに違いない、ということである。伝友閑筆本は、大正八年の当時、益田孝が所有し茶会に飾り、それを高橋義雄が借り出したりしていた、そういう『方丈記』写本であった。

なお、先引『萬象録』大正八年九月六日条は、伝友閑筆本について記した後にさらに、「近代に於ても大倉八郎翁が六十を越えて光悦風を習ひ大に成功せし例などあり」と述べている。「大倉八郎翁」恐らくは実業家の大倉喜八郎（二八三七〜一九二八）が六十歳を越えてから書道を習い始めて上達したという、この「近代」の「例」は、友閑が老年になってから書を学んで熟達したという、伝友閑筆本奥書に見えていて（356〜366行）、『萬象録』同条もそれに基づいて実線部A〜Dに記載している友閑の略歴から、想起したものなのだろう。そして、続く「余も亦是れより書道を研究すべく思ひ立ちしに就ては、近日榊原鉄硯氏を訪ひて其意見を尋ね臨写すべき書風等も相談する考なり」という記述からは、高橋自身も、鉄道界の功労者で書画などにも通じていた榊原鉄硯（一八五五〜？）の助言を得ながら、これから書道を習いたいと思っていることが窺える。『萬象録』のこの記事が記された大正八年（一九一九）は、高橋が五十八歳となる年である。同書大正八年九月五日条を先に掲げて確認した通り、高橋は益田から「方丈記」と「鴨長明集」を共に借りていた。しかし、翌日・九月六日の条には、右に見てきたように、「方丈記」奥書部分に限定して記述している。高橋は、老年になって書道を学び後世の手本にまでなったという友閑の略歴を、「方丈記」すなわち伝友閑筆本の奥書に発見し、高齢で習字を始めるということに対して、集中的に関心を寄せたようである。九月六日条の欄外見出しを、「藤田友閑齋筆の方丈記」などでなく「藤田友閑齋の習字」としたのも、その関心の現れだと考えられよう。

*

京都女子大学図書館所蔵の伝友閑筆本の伝来について右に報告した際にも取り上げたが、同本には、『方丈記』本文を書写したとは別の筆跡による奥書が存する（一面六行、後掲【翻刻】354〜369行）。その末尾に、

寛政六年丙寅南呂吉 八十翁白亭記之矣。

と見え、先引高橋『萬象録』大正八年九月六日条も「寛政六年八十翁白亭と云ふ人の奥書あり」と記していた。寛政六年（一七九四）時の奥書と知れる（ただし、干支「丙寅」は合っていない）。そして、その筆記者の「八十翁白亭」とは、滝本流（松花堂流）の手習帖である文化元年（一八〇四）刊『滝本煙葉帖』に載る「筆伝系略」に

分門白亭 神立愚鈍と記す。後上に備るごとく改名。委は原流帖に見ゆ。但、寛政丁巳晩夏よはひ八十三にして終り給ふ。東都本庄牛島長命寺に埋。名有。

と著録される、分門白亭すなわち神立愚鈍に違いない。「寛政丁巳」すなわち寛政九年（一七九七）に「八十三」歳で没した（右引傍線部）という点と、寛政六年時の奥書に「八十翁白亭」と記載している点とが、まさに符合している。

末尾部（366〜368行）によれば、右奥書は、「ます女」なる人物から筆跡の「鑑定」を依頼されて、当該写本の奥に、その鑑定結果を記したものであるに違いない。結論は、冒頭に述べられている。「この方丈の記は、摂州富田の里藤田彩雲翁友閑筆跡なり」（354〜355行）、と。それに続く「抑、翁は」以下「…後の世の手本となりぬ」まで（355〜366行）は、筆跡の主であると鑑定した「翁」友閑についての紹介である。

その紹介の部分は、友閑が松花堂昭乗に入門し精励に至った経緯（356〜364行）を中心としつつ、絵と和歌も学んだことや後世の手本となったことなどにも言及している。老年に至るまで筆道を学ばなかったことを妻に諫められて入門したという内容が特に目に付くが、同様のことは、先引『滝本煙葉帖』と同じく滝本流の手習帖である安永七年（二七七八）刊『松花堂筆跡法帖從元祖至九代』の「筆伝系略」も、

閑睡庵彩雲翁と号す。摂州富田の人。壮年にして字をなす事あたはず。其婦の諷諭によりて、はじめて醒々翁に学び、精励不倦事廿年一日のごとし。翁の門人おほしといへども、よく其右に出るものなし。又、和歌を詠じ画に工也。当流手習階等の法帖を梓にして伝授す。門人以千数といふ。

と記す。「摂州富田の人」「和歌を詠じ画に工也」（破線部）も伝友閑筆本奥書と共通する内容だが、特に注目したいのは、実線部。「醒々翁」すなわち松花堂昭乗への入門の経緯を記していて、先の奥書と同様の内容であること、明らかである。ただ、当該奥書の方が、「旅行又他行などのおりから事を欠らぬ。くゆるとも及はし」「今より学ひても事業なるへきや」「なるもならぬも汝のこゝろなり」と、妻の諫言の内容やその妻と友閑との問答などをより具体的に詳しく盛り込んでいて、印象深い。先述通り五十八歳になる高橋も、「高齢に至るまで筆道に疎か」ったのを諫められて入門したという、同奥書の記述に特に着目して、「余も亦是より書道を研究すべく」思い立っていた。

また、そもそも右に挙げた『松花堂筆跡法帖從元祖至九代』「筆伝系略」は、小松茂美『日本書流全史』二（同氏著作集第十六卷）の「Ⅷ書流の展開と定着」のうち「C滝本流」に引載されたものだが（先引『滝本煙葉帖』も同じ）、入門経緯についての同書の記述（先引実線部）に基づく紹介が、小松茂美編『日本書蹟大鑑』第十五卷（講談社、昭53）の「藤田友閑」条にも、「壮年のころ悪筆で、妻の諭しによって、はじめて松花堂昭乗の門に入る。精励二十年一日のごとく稽古に励んだ」と盛り込まれている。そのように、従来、『松花堂筆跡法帖從元祖至九代』の記述によって把握されてきた友閑入門の経緯が、より具体的に生き生きと浮かび上がるようである点において、伝友閑筆本の奥書は、相応の意義を有していると言えようか。

しかしながら、右のような入門までの経緯、妻に諫められたということとはもちろん、高齢になってからの入門という点についても、すべて史実ではないようである。寛文三、四年（一六六三、四）、友閑六十三、四歳時の著作『和国筆道

『三秘鈔』全八卷五冊（国立国会図書館蔵）の記述によれば、「松花堂入門の時期は」「十九歳の頃（一六一九年）である」と、川畑薫「近世前期・筆道伝書作成に関する一考察―「松花堂流」の確立をめぐる―」（『青山杉雨記念賞第五回学術奨励論文選』、平14）が指摘している。右川畑論文はまた、「藤田友閑年譜稿」を作成、「元和五年己未（一六一九）一九歳」条に「八月九日、初めて松花堂に見え、その冬に手本を受ける」と記載してもいる。川畑論文は、『和国筆道三秘鈔』のうち、「本編にあたる」第一〜三冊の翻刻を掲載してもいるが、入門の経緯を叙述しているのは、翻刻対象外の第五冊の巻八追加下においてである。未翻刻の部分でもあるので、少々長いが、入門の経緯についての叙述を含んだ項目全体を、次に引用しておく。

さて、国のうちには木の道のたくみのみわさに堪たるかとおもふに、いなや、そのみに限らず。世にみちく／＼ておほかる百のたくみの作れる品々の器物をみるに、其かたちの艶にうるはしきのみにあらず、各宜に叶ひ中庸の道にあたりて、古人の規矩、天真自然の正理に背けるはなし。抑百工の輩に筆芸のをとれる事はいかなる故にやと思ひはかるに、彼百工の輩は生れたる所のまゝにいはいはけなきときより、をのか愚痴なるつとめをみかけるにてそ有ける。たゞ師の伝へ、親のをしへをありのまゝに守り行て、いさゝかも他念を生せず、一向にわさをのみ一大事とつとめぬるにより、程なく修行なりたちて、早く家業を継事にてそ侍る。今時書生学士のたくひ、筆芸を嗜むかた／＼は、生れたる所穎利にして、才智百工に万倍也。これに依て、智解分別ます／＼長し。聞として会せずと云事なく、慮るにあたらすと云事なし。此故にわさをつとむる事なく、理を以てわさを推し、解を以て行にあてゝ、広く学ひ深くさとせるにつけて、弥くはしく益／＼明かなり。是によりて愚癡なるつとめをみかく事は、いよ／＼うすくますます／＼疎か也。是、其掲焉たる所ならずや。此故に、手もとなる理は見えかたくして、見も弁へず。各別奇異高等の道あらん事を求めて、つゝに彼浮夸臆乱やうなどに心をよせらるゝ故に、平直の正

理をうしなはれ侍也。我聞、儒釈道の奥秘深義会得せる上に至りて、何の用に立ぬる事かと尋ぬるに、己を修め人を治るのみにして、日用のうへ平直ならしめん為也とそ。此故に、日用平直の上をつとめしむるを教の本とし修行の先とはせり。日用平直の外別に用る所あり、別に一道ありといは、其用ひ処は、いつれの処にや。又、其道はいかやうなる道にや。もし用る所、其道出世格外也といは、世間を離て出世なく、平直を離て格外なし。筆道も又、是に同じ。日用のうへ日用の書、押ならへて平直ならしむるを筆道の教としてつとめしむるのみ也。今いはゆる二三十人の学者は天資穎利にして智恵秀英也。わさの勤めもや、よろし。つとめてやまさらましかは、他日頭角相応なる事、虎に角を生たらんにてひとしかるへき。然らば則誰をかはち、何をか恐れらるへき。但、悲しむらくは、これこの虎の百獸に秀たる角の自慢あるより、大過のなり出む事は、尤あやうからすや。翠以羽自殘龜以智自害と云る本文、実哉。其物につきて其物をそこなひ破る事を古人の云るは、是ならし。やつかれ前十年はかりは、世間に多きならはしにひかれて惘然と暮し侍り。高祖大師云、多類者難^{ツキ}竭^キ寡^{タクヒ}、偶^ハ者易^ハ傾、自然之理使^レ然云々。むへなるかな。師の警に預る事はすくなく、浮世の邪にそめる事は多かりし故也。幼少の時より此道すける事に侍しに、井の蛙・遼東の豕のことくに、私家心中にもてはやす手かきには、かの行草偏僻の二流のたくひ、又は浮夸からやうのやからの今も世に多かるたくひ、さまざまの手かきの少も名有と聞るは、爰にはせかしこに走りて尋ねとひ、或は二ヶ月三ヶ月、或は半年一年うけ学ひぬるに、其多くは正しからず、其本明かならず。もしふかく推尋ぬる事に侍れば、口をつくみて止ぬるもあり。胡説^Aとる所なきも侍りき。是によりて世に床しと忍ふ手かきも聞え侍らさりし折ふし、ひとり先師松花堂のわかおはしますに、奇異の天才と伝聞てそいふかしくは侍りき。御筆の跡をみるにも、よのつねにはことに侍り。是によりてひそかに習ひこゝろみ侍りしに、やゝ似よりてさのみふき^か事には思はず。今すこしたかひぬる所は人のしるへきならねと、いたくにせてし

かなと深く思ひいれて習ひもて行程に、弥似さる所をしれり。月をこへ年に及びぬれば、其大にかなはさる所を
弁へ、人意のなせる所にあらさる事をさとしたり。爰^Bにやつかれ十九歳に侍る八月九日に初てまみえ奉りて、
其年の冬、御手本を給ひ、明年二月二日に清書を尊覧に備へ奉りし。御詞の響、左之右之を窺ひ侍るに、銀海光
うるほひて童子全く正しく、五嶽ゆたかに儼に光彩うちにかゝやきぬ。仰き望むに恐れありといへとも、近付奉
るにいつくしみ深し。いにしへの大宗匠、権化、聖賢のもし今日に出現まし／＼て拝み奉らは、かくこそあらめ
と思ひ侍し。されと濁世にそみならへる心の愚かさに、かゝる明師の御指南に預りなは、やすく能書、妙手にも
到らん事とはかり思ひて、務め疎かに信うすくして、あたら年月を等閑にそ送り侍る。かくて年をつみ度を重ね
て教誨を蒙り奉りゆくにつけて、仰けは弥高くきれば弥かたく、雲の梯してのほるへからさる事をしり、前非を
悔といへとも、世の塵は払ふに日々／＼に多く積りて尽しかたく、身の労は養ふに年／＼に競ひて衰へやすうし
て、勤むる事あたはず。只、志のみにて明し暮しつゝ、つゝみにかの百工のしわざにもしかず。畜類のたくみにも
劣りてそ老にたる。かく大儀なる手習、何のいさみありてか、かゝつらへるにや。世にいくはくあなる流／＼に
はたやすく成就するも多かれは、なそ一流には固執するそと思へる人もあらん。なれと、今も世に多く行はるゝ
は、昔も多かり。皆やつかれか染ぬる前非を悔る類ひのみなれば、床しとも思ひ侍らす。かくかたりつゝくるに、
いと昔こひしくそ思ひ出ぬる。

前半には、筆道修練のあり方などについて、その問題点を指摘していて、「や●つ●かれ」以下の後半に、自らの経験を
振り返って叙述しているようである。その後半部の中に確かに、「先師松花堂」の評判を聞いた（実線部A）あと、
十九歳時の八月九日に至って初めて会い、同年冬に手本を受け、明年二月二日に清書を見せた、と記している（実線
部B）。また、それより以前にも、「幼少の時より此道すける事に侍し」ということで、「さま／＼の手かきの少も名有

と聞るは、爰にはせかしこに走りて尋ねと」うていた、などと述べてもいる（波線部）。友閑自らの記述であるので、これらこそが史実であるとすれば、高齢での入門も妻の諫言も、史実を超えた一つの伝承だということになる。そして、伝友閑筆本の奥書は、そうした伝承が、先引『松花堂筆跡法帖從元祖至九代』の記述などに止まらず、滝本流の中でかなり広く行われていたらしいことを窺わせるという、そういう意義をこそ有することになる。なお、史実と正反対のような内容の伝承がいかにして生じて定着することになったのか、次の問題として気に掛かるところではあるが、今はまだ検討し得ておらず、明らかではない。滝本流の種々記述の中から友閑に関する記事を拾い出していくことで、ある程度解決できる問題であるのかもしれない。

ところで、伝友閑筆本の奥書を記した分門白亭すなわち神立愚鈍は、「瀧本流門弟のひとりであり、自らも弟子をもつ一方」、「瀧本流手本の編纂を手掛け」³てもいるなど、「近世中期から後期にかけて、とくに瀧本流の普及に大きな働きを果たした人物と考えられる」。「友閑の口伝を、乗因が筆記したと考えるのが妥当かと思われる」『初学手習初門要』を愚鈍が書写するとともに、それに愚鈍が序を加えて、「此『初門要五十箇條』は、松花堂世を去り給て後、高弟藤田友閑、此一流字世に弘通し、筆道の学者をも誘引せむか為に、翁より伝へられし筆道、初門に用ゆべき要とする所、五十箇條を、門人に教示侍り」などと記している（前掲川畑論文）。そして、伝友閑筆本の奥書では、友閑について「後の世の手本となりぬ」（366行）と述べていた。そんな愚鈍であれば、全くの門外漢である稿者らはもちろん、現代の専門家たちよりも圧倒的に多く、友閑の筆跡に接していて、それを熟知していたことであろう。その愚鈍が友閑筆と鑑定しているのであるから、伝友閑筆本が友閑の真筆本である可能性は相当に高いと考えられる。まさに友閑筆であれば、十七世紀半ば前後の書写ということになるが、その点、墨跡などから受ける印象と齟齬しない。友閑真筆で間違いなくすると、小稿の取り上げる『方丈記』写本は、「翁の門人おほしといへども、よく其右に出るものなし」

(先引『松花堂筆跡法帖從元祖至九代』「書家者流の祖となれり」(寛政八年刊細合半齋『滝本棗』、日本書論集成6)といふ藤田友閑の、まとまった真筆作品として、日本書道史上の小さからぬ意義を帯びることになる。

先述通り、益田孝が高橋義雄を招いたのは、「鴨長明の方丈記に拠り」(先引『萬象録』大正八年九月四日条)「日野山の方丈」を「其儘強羅山に再現」(先引『東都茶会記』)した「方丈庵」での「茶会」(先引『萬象録』大正八年九月六日条)であったが、昭乗もまた、「坊の南阜に松花堂といふ方丈を建て三昧に入」(『松花堂行状』、『かがみ』20収載翻刻)り、「松花堂下云」「方丈ノ室ヲ造リテ静ニ居」(『中沼家譜』、茶道全集5所載片影)り、そのうえ長明の肖像画を描いてもいて、⁽⁴⁾「鴨長明をしのび、方丈記を耽読した」(前掲小松茂美『日本書流全史』二)人物である。その昭乗に対する友閑の熱烈な尊崇ぶりは、先引『和国筆道三秘鈔』の破線部などからも十分窺えるところであって、友閑が『方丈記』を書写したとすれば、右のような師・昭乗の影響があったものであろう。友閑が師と仰ぐ昭乗の右の如き一面が、当該の『方丈記』写本が友閑の真筆であることを裏付けている、とも言えるだろうか。さらに、友閑はそもそも、そうした昭乗の手許にあった、あるいは昭乗筆の『方丈記』を書写したのではないか。そんな想像も働くであろうし、その可能性は決して低くないものと見られる。⁽⁵⁾ 伝友閑筆本を通して、松花堂にあった『方丈記』を、我々は見ることができているのかもしれない。

*

伝友閑筆本の『方丈記』は、古本系統と流布本系統を分かち主要な指標として通常挙げられる三点においていずれも、流布本系統の方と一致する本文を有している(ごく一部に異なる本文も含む)、基本的に流布本系統に属するもの

である。同じく流布本系統に属する、天理図書館所蔵江戸初期寛永頃写本は「本文は正保版本と全く同じ」になっていて（青木伶子編『広本略本方丈記総索引』武蔵野書院、昭40）、名古屋市蓬左文庫所蔵江戸中期写本も「正保版本乃至はそれと同系統の本の写しか」（鈴木知太郎「方丈記諸本解説」『方丈記』武蔵野書院、昭34）とされる。また、京都女子大学図書館に所蔵されている流布本系統の写本のうち、⑳文政十二年写本が正保版本の忠実な写しと見られること、小稿冒頭に掲げた中前「略目録稿」に述べており、⑥『無名抄』合綴江戸前期写本については、「略目録稿」の時点では不明であったが最近に正保版本またはその同系本のほぼ忠実な写しであることが判明した。^⑥これらに対して伝友閑筆本の場合、後掲の【校異】「伝藤田友閑筆写本と正保版本・学習院大学本」から窺われる通り、無論、同じく流布本系統に属しているのだから正保版本と同一あるいは近似する本文も全面的に拮がっているが、同本と異なる本文も広く見られるのであって、決して同本の写しのようなものではない。さらに、先の主要な三点の指標となる本文以外で、流布本系統の伝本になく古本系統の方の伝本にのみ存する本文と共通するものも少なからず認められる。

ところで、冒頭に引用した「略目録稿」よりも十五年以上前の平成九年一月二十五日、仏教文学会本部一月例会が京都女子大学J校舎にて開催された際、図書館分館内の学習室にて図書の特展観を実施し、小稿の取り上げる伝友閑筆本も出品した。その時に中前が作成した簡略な小冊子『仏教文学関係図書特別展観目録稿』（京都女子大学図書館、平9）に、同本の本文について、

『広本略本方丈記総索引』所載の本文の中では、流布本系でありながら、古本系の学習院大学本に近い面が多く見られるように思われる。

と述べた。しかし、「さらに詳細なその性格については、今後の検討に委ねたい」とも断っておいたように、右の時点では右以上には追究していなかった。そして、先の「略目録稿」を経て、今回の小稿が、その「今後の検討」にあたる。

右引『特別展観目録稿』に言う「学習院大学本」とは三条西家旧蔵のもので、『広本略本方丈記総索引』が、「この本は決してよい本文とは言へないのであつて、わざ／＼とりあげる事はないとも考へたのであるが、どのやうに不純であるのか知りたいと思つた自分の経験に徴し、序を以つて加へる事にした」と説明している本である。危うく「見るに堪えない杜撰な本文を持つ本は、校合の対象として顧みられることさえない、という現象^①」の一事例となりかけていた本である。伝友閑筆本は先述通り、基本的に流布本系統に属しながら、古本系統の伝本の本文と一致する面も少なからず見られるのだが、そうした古本系統の伝本のうち特に注目すべきなのが、「決してよい本文とは言へない」学習院大学本なのである。同本との近さを、まずは確認しておきたい。

鈴木知太郎「方丈記諸本解説」は、学習院大学本について、「本文は古本系統に属するものであるが、その系統中においては、他のいずれの諸本とももつとも多くの差異を存している」と指摘する。実際、『広本略本方丈記総索引』が取り上げる、学習院大学本を含む大福光寺本など古本系統諸本計十一本の中で、学習院大学本にのみ見られる本文（『古本系統内学習院大学本独自異文』と称することにする）が、三〇〇余り見られる。そのうち四〇ほどは、『広本略本方丈記総索引』の取り上げる流布本系統の六本には見られるが、それら以外は、流布本系統の六本にも見えず、『広本略本方丈記総索引』の取り上げる古本系統・流布本系統合計十七本を通じての独自異文ということになる。そして、右の古本系統内学習院大学本独自異文三〇〇余りのうち実に四割近くの一二〇ほどが、伝友閑筆本に共通して見られる。しかも、そのうち九〇ほどは、流布本系統六本にも見えない本文になっている。それら本文は、流布本系統六本に、基本的に流布本系統に属する伝友閑筆本を加えた七本のうち、伝友閑筆本にのみ見られる本文（『流布本系統内伝友閑筆本独自異文』であつて、かつ、古本系統内学習院大学本独自異文でもある、ということになる。言い換えれば、古本系統・流布本系統計十七本に伝友閑筆本を加えた十八本全体の中で、伝友閑筆本と学習院大学本とのみに共通する本文が、

九〇ほども認められるのである。伝友閑筆本の本文が、学習院大学本に見える特異な本文のかなりの部分を共通して有している、あるいは逆に、学習院大学本の本文が、伝友閑筆本に見える特異な本文のかなりの部分を共通して有している、ということであつて、両者が近い面を顕著に持っていること、確かであろう。以上、後掲の【校異】そして【対照一覧】「古本系統内学習院大学本独自異文と流布本系統本文および伝藤田友閑筆写本本文」参照。

特に目に付く例を、具体的にいくつか挙げておく。いずれも、伝友閑筆本を含めた右の計十八本のうちで、同本と学習院大学本とのみに共通して見られる本文である。(一)内に行数を示しつつ掲げた本文は伝友閑筆本の本文で、学習院大学本のみとの共通本文に傍線を施した。また、同共通本文について表記の相違などがある場合にのみ、そのすぐ下の「」内に対応する学習院大学本の本文を載せた。そして、≪≡内には、傍線部に対応する大福光寺本の本文を載せた。大福光寺本と異なる本文を持つ伝本がある場合、その本文も適宜併記した。傍線部と対応する本文が無い場合は、「×」と記した。

- 1 都の中すへて「都のうちすへて」三分か一に及へりとそ。(38〜39行) ≪惣テミヤコノウチ・すへて都の中≫
- 2 大かた、此京の始を聞は、桓武天皇「桓武帝」の御時、都とさたまりしより後(61〜62行) ≪嵯峨ノ天皇≫
- 3 同き年の冬十一月廿六日に帰り給ひにき。(90〜91行) ≪×≫
- 4 かはりゆくかたちありさま、目もあてられず。(120行) ≪アテラレヌコトヲホカリ・あてられぬ事多かりき≫
- 5 爰に「こゝに」あやしき事は(125行) ≪×≫
- 6 はしり出れば、又地裂破る「さけやふる」。(157行) ≪ワレサク・われぬ・われさけなんとす≫
- 7 二三十度ふるはぬ日はなかりし。(168〜169行) ≪ナシ≫
- 8 声をあけてなく事をはゝかり、進退やすからず(182〜183行) ≪ナシ・かきりなし≫

9 かれに 十歳はかりなる小童あり。(256行) イ《カシヨ》 ロ《×》

10 一身をやとすにたらずといふ事なし。(288～289行) 《不足》

11 栖はなましゐに「なましいに」浄名居士の跡をけかせりといへとも(343～344行) 《スナハチ・×》

12 于時建暦の二とせ^五 弥生の晦日の比(349行) 《×》

平安遷都についての2や、福原から平安京への還都についての3は、歴史的な記述が他本とは異なっていて、伝友閑筆本と学習院大学本とのみに共通している場合。9の口は、この箇所の一・二行あとに、小童を指して「かれは十歳」(258行)と記述されており、その点、大福光寺本を始め、学習院大学本も含めて、諸本ほぼ共通しているが(前田本は「十歳」のみ、正保版本などは「かれは十六歳」、その情報を「小童」の説明として加えたものであるらしい。そういう形での説明の追加(重複)が、伝友閑筆本と学習院大学本にのみ共通して見られるのである。1は、他の諸伝本本文に対して語順が前後入れ替わった形、5は接続詞が加わった形、12は干支が加わった形で、やはりいずれも両本特有のものである。他は、大小様々に表現などが、他の諸本とは異なっていて、両本だけに共通している。

A 或はほのほにまくれてたちまちに死す。(34行) 《死ヌ・しにぬ》

かくしつゝ数もしらす死する事を悲しみて(138行) 《死ル・死ぬる・死ぬ》

其前後に死する者多く(144行) 《シヌル》

B 軒をあらそひし人の栖か「すみか」(70～71行) 《スマヒ・栖居・住居・住ぬ》

是をありし住家「すみか」になぞらふるに、十分か一なり。(199～200行) 《スマヒ・栖居・住居・すまる》

C おひたゝしく大地ふるひうこく事侍りき。(149～150行) 《ヲホナキフル・大なひふる》

大地ふるひさけて「大地ふるいさけて」(173行) 《ヲオホナキフリテ・大なひふりて・大地震ふりて》

D 心をなくさむ事は是同し。(259行) 《ナクサムル》 *学習院大学本は、「心を」でなく「心の」。

勝地はあるしなければ、心をなくさむにさはりなし。(263～264行) 《ナクサムル》

E たゞ、我身を奴婢とせんにはしかず。(305行) 《スル・なす》

いかゞ我身を奴婢とせんとならは(305～306行) 《スル》

やはりいずれも、伝友閑筆本を含めた古本系統・流布本系統計十八本のうち、伝友閑筆本と学習院大学本のみに通して見られる本文。これらA～Eでは、複数箇所において、両本が同じように、両本特有の本文を載せている。こうした事例では、偶然の一致という可能性が低くなって、両本の近さを一層強く感じさせよう。ほぼ一貫してサ変動詞「死す」を使用する傾向が窺えるようであるAや、他本とは本文がかなり異なるCなど、特に目を引こう。なお、「死す」は、学習院大学本との共通異文ではないので右には挙げていないが、右以外にも、伝友閑筆本に「死する人」(13行)「死する者」(39行)「倒れ死す」(117～118行)「うへ死するたくひ」(118行)「死す」(132行)と見える。

a 又、同年のみな月の比、俄に都移りと侍き。(60行) 《×》

b 其時、みつからことの便り有て、摂津国、今の京にいたれり。(74～75行) 《ヲノツカラ・自ラ》

c なへてのほる物なければ、さのみやはみさほも作りあへむ。(106～107行) 《タヘテ・絶て》

d よはひは中くくに「中々に」たかく、栖は折くにせはし。(215行) 《歳くニ・年々に・年く》

e 夫、三界は唯心の一なり。(327行) 《心ヒトツ・心一つ・心一・一心》

a～e いずれも、本文として不自然であったり、誤りと見受けられたりする事例。例えばeは、『華嚴経』に拠るものだが、少なくとも通常とは異なる読みあるいは理解であろう。これらが、十八本のうち伝友閑筆本と学習院大学本にのみ共通して見られるのもまた、両本の近さを一層強く感じさせるであろう。

冒頭に引用した「略目録稿」にも述べている通り、伝友閑筆本は、内題「方丈記」の下に「鴨長明述」と記しているが、学習院大学本も同じく、本文冒頭に「方丈記鴨長明述」と記している。「鴨長明方丈記」「長明方丈記」という外題あるいは内題を有する事例は多いが、「鴨長明述」と冒頭に記載したものはほとんど見ないのではないか。右に具体例を挙げて確認してきたような、他本には見られない特徴的で特異な本文を共有するということは別に、そんなところにも、両本の近い関係が窺われるであろう。

鈴木知太郎「方丈記諸本解説」は、古本系統の伝本を三類に分類しているが、「系統中においては、他のいずれの諸本とももつとも多くの差異を存している」ということから、学習院大学本一本だけを独立させて「第三類本」としている。同本のそんな孤立的な位置付けは、以降も同類の本文を有する伝本についての報告なく、今もなお変わっていないのではと見られる。そうしたなかで、全てではないもののある程度まとまって、学習院大学本に見られる特異な本文を共通して有する伝友閑筆本の存在は、大いに注目されるところであろう。しかも、学習院大学本が、右の鈴木解説に「その書写は、まず江戸中期をさかのぼるものではあるまい」とされ、さらに神田邦彦「先行研究に見る『方丈記』の諸本とその影印・翻刻・解題一覧(稿)」(『鴨長明とその時代「方丈記」800年記念』国文学研究資料館、平24)に「江戸後期写」と記される伝本であるのに対して、伝友閑筆本は、前節に検討した通り伝友閑真筆本だとすれば、十七世紀半ば前後のころの写本である。学習院大学本に見られる特異な本文のうちかなりの部分が、遡ってそのころには発生していた、という事実が浮かび上がることもなる。さらに、先述通り伝友閑が松花堂にあった『方丈記』を書写した可能性が低くないのだとしたら、それら本文は、もともとそちらの松花堂所在の『方丈記』に存するものであった可能性も低くないことになる。

学習院大学本が、「決してよい本文とは言へない」(先引『広本略本方丈記総索引』)ものであって、その特異な本文

の中には、誤写や脱文の類を少なからず含んでいること、後掲の【校異】や【対照一覧】からも窺えるところであるが、右の鈴木解説は、同本について、「もと古本系統から出たものではあるが、伝来の途次において、あるいは誤写、意改、または他本による校合本文、ないしは傍注の混入などによって、諸種の要素を含むに至り、次第に本文の不純化を招いて、ついに今日に見るような文章を形成するにたち至ったものと考えられる」と、的確に指摘している。先に確認してきた通り、その学習院大学本と特異な本文をかなりの程度共有していて、同本と近い関係を有すると見られる伝友閑筆本は、直接ではないにしても、学習院大学本における「本文の不純化」にどこかの段階でかなり濃厚に関与したものと想定されるだろう。伝友閑筆本に見られる特異な本文が、どこかの段階で学習院大学本へと流れ込んでいった、ということである。そして、その伝友閑筆本が、松花堂にあった昭乗所持あるいは昭乗筆の『方丈記』を、まさに親本として友閑が書写したものであるとすれば、こんな風に言うこともできるだろう。——不純度を深化させながら学習院大学本として結実を見た極度の不純本文は、松花堂にあったと覚しい『方丈記』の中に早くも、その片鱗を見せていた。

以上、京都女子大学図書館が所蔵する伝藤田友閑筆写本を取り上げ、その近代における伝来の一場面を抽出したうえで、奥書の記述をめぐって考察するなかで藤田友閑真筆本である可能性を探り、最後に、本文の性格について学習院大学本との関係に絞って検討を加えておいた。結果、不純を極めた本文が生成していく過程の、興味深い一局面が浮かび上がることになった。

小稿は、令和二年度前期の本学大学院文学研究科の授業「中世文学演習Ⅰ」において、担当者の中前と受講生の梶山が共同で行った検討の結果を、まとめたものである。

(1) 大濱徹也・熊倉功夫・筒井紘一校訂『萬象録 高橋箒庵日記』巻七(思文閣出版、平2)に拠る。引用に際しては、通行字体に改めた。以下の諸文献の引用についても同じ。さらに句読点を加えるなどした場合もある。

(2) 『東茶会記』第七輯下巻(慶文堂書店、大9) 66頁。

(3) 山口恭子「慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』について——松花堂昭乗筆本の開版をめぐる——」(『日本文学誌要』91、平27)。

(4) 『國華』917(昭43) 収載影印および解説(吉澤忠)。また、築瀬一雄『古典を読む 方丈記』(大修館書店、昭56)「長明の画像」参照。なお、昭乗筆の長明肖像画を祐為が写したものが、下鴨神社に所蔵されている。

(5) 例えば、近衛前久(龍山)から昭乗に伝えられ、さらにその門弟の乗淳・友閑へと伝襲された一首歌仙本『三十六人歌合』のあったことが知られている。新藤協三「一首歌仙本『三十六人歌合』の諸形態」(『三十六歌仙叢考』新典社、平16) 参照。同様に昭乗所持あるいは昭乗筆の『方丈記』が友閑の手に渡り、それに基づいて友閑が書写する、というようなことが、かなり強く想定されるところだろう。

(6) 令和二年度前期における国文学科二回生対象の授業「基礎演習A」での検討の結果である。句読点・振り仮名・濁点の有無、漢字の宛て方、仮名遣いのあり方、送り仮名の送り方についての相違、および漢字と仮名の相違、それらを除いて、⑥『無名抄』合綴江戸前記写本と正保版本との間で相違する本文は、次の十二例のみ。いずれも微細な相違である。番号は『広本略本方丈記総索引』の行数、その下が正保版本の本文、()内が対応する⑥の本文。

3世中(世の中) 8なる(なり) 25かり屋(屋) 29光に(光は) 49ふき板の類ひ(ふき板類ひ)

111あまさへ(あまつさへ) 149況や(況は) 157しばく(しばし) 165にこりも(にこり) 191及ばず(及)

210外に(外へ) 259草むら(□草むら) *□判読不能

(7) 福田安典「神の国のほとりの方丈——『方丈記』異本——」(『近世文藝』110、令1)。

方丈記

鶴長明述

乃河のちりなきまうて赤色好む女を
 上より下りてゆくやうにわたりて久し
 うもれぬがごとく帯はあはれと極む又かくれごとく
 玉は玉の部のうちに棟をさすといふ女はあはれと極む
 ときもやうと云ふ極むを極むはあはれと極む
 女は是を識るも為わきそ昔あはれと極む
 かくれ或は極むを極むこと極む或は大家の女と
 小家の女と云ふは是に同く所もあはれと極む人も
 多しは、少く見ると三三十八人中より五人は

- ・基本的に通行字体に改めるとともに、私に句読点を施した。
- ・行送りは元のままとし、行番号を五行ごとに行頭に付した。また、半丁ごとに、その末尾を「1才などと示した。

方丈記

鴨長明述

行河のなかれはたえすして、しかももとの水にはあらず。

よとみにうかふうたかたは、かつきえかつむすひて、久しく

5 とゝまる事なし。世中にある人と栖と、又かくのことし。

玉しきの都のうちに、棟をならへいらかをあらそへる、

たかきいやしき人の栖は、代々を経てつきせぬもの

なれと、是を誠かと尋ぬれば、昔ありし家は稀

なり。或はこそやけてことし作り、或は大家ほろひて

10 小家となる。すむ人も是に同じ。所もかはらず、人も

多かれと、いにしへ見し人は、二三十人中に、わつかに

ひとりふたりなり。朝に死し夕に生るゝならひ、只

水の泡にそ似たりける。しらす、生れ死する人、

「1才

15

いつかたより来りていつかたへかさる。又すらす、かりの
 やとり、誰かために心をなやまし、何によりてか目を
 よろこはしむる。其あるしと栖と無常をあらそへる
 さま、いはゞ朝かほの露にことならず。或は露落て、花
 残り。残るといへとも、朝の日にかれぬ。或は花はしほ
 みて、露猶きえず。きえずといへとも、夕を待事なし。
 凡、物の心をしれりしより、四十余の春秋を送れる間に、
 世のふしきを見る事、やゞ度くになりぬ。

20

○去安元三年四月廿八日かとよ、風はけしう吹てしつかな
 らさりし夜、戌の時はかりに、都の巽より火出来りて

「 1ウ

25

乾にいたる。はてには、朱雀門、大極殿、大学寮、民部省
 まてうつりて、一夜のほとに塵灰となりにき。火もとは
 樋口富小路とかや。病人をやとせるかり屋より出来りける
 となん。吹まよふ風にとかくうつり行程に、扇を
 ひろけたることくに末ひろこりになりぬ。遠き家は
 煙にむせひ、近きあたりはひたすらほのほ、地に吹つけ
 たり。空には灰を吹たてたれば、火の光に匂いして
 あまねくくれなる中に、風にたえす吹きられ

30

たるほのほ、とふかことくにして、一二町を越つゝ移行。其中の人、うつし心ならんや。或は煙にむせひてたふれふし、或はほのほにまくれてたちまちに死す。あるひは又、わつかに身ひとつからうしてのかるゝといへとも、資財を取出るに及はず。七珍万宝さながら灰燼となり

「 2才

にき。其つゝゑ、いくそはくそ。此度、公家の家十六やけたり。まして、其外はかそふるに及はず。都の中すへて三分か一に及へりとそ。男女死する者数千人、牛馬のたくひ辺際をしらす。人のいとなみ皆をろかなる中にも、さしもあやうき京中の家を作るとて、財をついやし、心をなやます事は、すくれてあちきなく侍し。

○又、治承四年卯月廿九日、中御門京極の程より大なる辻風おこりて、六条あたりまでいかめしうふける事侍りき。三四町をかけて吹まくる間に、其中に籠れる家とも、大きなるもすこしきも、一として破れさるはなし。さなからたいらにたふれたるもあり、けた柱はかり残れるもあり。又、門の上を吹はなちて四五町か程にをき、また、垣を吹はらひて隣とひとつになせり。いはんや、家の中の

「 2ウ

50

資財は、数をつくして空にあかり、ひはたふき板のたくひは、冬の木の葉の風にみたるゝかことし。塵を煙のことく吹たてければ、すへて目も見えず。おひたゝしくなり

とよむをとに、物いふ声も聞へす。かの地獄の業風なりとも、

か計にこそとそ覚えける。家の損亡するのみにあらず、

是をとりつくるふ間に、身をそこなひ、かたわをつく

人は、数をしらす。此風のひつしきるのかたにうつり行て、

おほくの人の歎となれり。辻風は常にふくものなれと、

かゝる事やはある。たゝ事にあらず、さるへき物のさとし

にやとそ、うたかひ侍し。

60

○又、同年のみな月の比、俄に都移りと侍き。いと思ひの外なりし事也。大かた、此京の始を聞は、桓武天皇の御時、

都とさたまりしより後、既に数百歳を経たり。こと

なる故なくして、たやすくあらたまるへくもあらねは、是を

世の人たやすからすうれうるさま、ことほりにも過たり。

されとも、とかくいふかひなくて、みかにより初め奉りて、大臣、

公卿、皆ことくく移り給ひぬ。世につかふる程の人、誰かは

ひとり故郷に残りおらん。官位にも思ひをかけ、主君の

「 3 才

「 3 ウ

かけをも頼むほどの人は、一日成ともとくうつらんとはけ
ましあへり。時をうしなひ、世にあまされて、期する所な
き者は、うれいなからもとまり居。軒をあらそひし人の
栖か、日を経つゝあれゆき、家はこほたれて淀川にうかひ、
地は目前に畠となる。人の心皆あらたまりて、只、馬鞍

をのみおもくして、牛車を用る人なし。西南海の所領を願
ひ、東北国の庄園をは好まず。其時、みつからことの便り有
て、摂津国、今の京にいたれり。所の有様をみるに、其地、
程せはくして条里をわるにたらず。北は山に傍て高く、

「 4 才

南は海に近くしてくたれり。浪の音つねにかしかましく
して、しほ風殊にはけし。内裏は山の中なれば、かの木の丸殿
もかくやと、中くやうかはりて、優なる方も侍りき。日
毎にこほちて、河もせきあへすはこひくたす家、いっこに

作れるにかあらん。猶空しき地はおほく、作る屋はすく
なし。故郷はすてにあって、新都はいまたならず。あり
としあるもの、皆うき雲のおもひをなせり。もとより此
所における者は、地をうしなひてうれへ、今移り住人は、土木の
わつらひある事をなけく。道のほとりをみれば、車に

のるへきは馬にのり、衣冠布衣なるへき人はおほくひた
たれをきたり。都のてふりたちまちにあらたまりて、
只、ひなひたるものゝふに異ならず。是は世のみたるゝ

「 4ウ

瑞相とか聞をけるもしるく、日を経つゝ世中のうきたちて、人の
心もおさまらず。民のうれへつゝに空しからされは、同き年

の冬十一月廿六日に帰り給ひにき。されとも、こほちわたせ

りし家ともは、いかに成にけるにか、ことくくもとのやうにもつく
らす。つたへきくに、いにしへのかしこき御代には、あはれみを

93
こ||本文が読みにくい
ため傍記したもの。

もて国を治め給ふ。則、御殿にかやをふきて、のきをたも
とゝのへす、煙のともしきを見給ふ時は、かきりある御調物
をさへゆるされき。是、民をめくみ、世をたすけ給ふによりて

本文と別筆か。

なり。今の世のあり様、昔になそらへて知ぬへし。

○又、養和の比かよ、久しく成てたしかにもおほえず。二とせの間、
飢餓して浅ましき事侍りき。或は春夏の日てり、或は

「 5オ

秋冬の大風、大水など、よからぬ事とも打つゝきて、五穀こと

くくみのらす。むなしく春たかへし、夏うふるいとなみのみ
ありて、秋かり、冬納むるそめきはなし。是によりて、国々

の民、或は地を捨て境を出、或は家を忘れて山にすむ。様

くゝの御祈りはしまり、なへてならぬ法ともおこな

はるれとも、さらに其しるしなし。京のならひ、なにはにつけても、みなもとは田舎をこそ頼めるに、なへてのほる

物なければ、さのみやはみさほも作りあへむ。念しわひつゝ、

さまくゝの財物かたはしよりすつるかことくすれとも、

さらに目見たつる人もなし。たまくゝかはる物は、金を輕

くし、粟をおもくす。乞食、道のほとりに多く、うれへ

かなしむ声耳にみてり。先の年、かくのことし。からうして暮

ぬ。明る年は、たちなをるへきかとおもふに、あまつさへ疫癘う

ちそひて、まさるさまにあとかたなし。世の人皆やみ死に

ければ、日を経つゝきはまりゆくさま、小水の魚のたとへに

かなへり。はてには笠うちき、あしひきつゝみて、よろ

しき姿したるもの、ひたすら家ことにこひありく。かく

わひしれたるものとも、ありくかとみれば、すなはち倒れ

死す。ついひちのつら、道のほとりに、うへ死するたくひは、

数もしらす。とり捨るわさもなければ、くさき香世界に

みちくゝて、かはりゆくかたちありさま、目もあてられず。

河原などには、馬車の往かふ道たにもなし。あやしき

「 6 才

「 5 ウ

賤山賤も力つきて、薪にさへともしく成行は、頼む

かたなき人は、みつから家をこぼちて市に出て売に、

一人か持たるあたひ、猶一日の命をささふるたにも及は

すとそ。爰にあやしき事は、かゝる薪の中に、丹つき、

白銀、金のはく所くにつきて見ゆる木のわれ、あひ

ましれり。是を尋れば、せんかたなきもの、古寺に至

りて、仏をぬすみ堂のものゝ具を破り取て、わりくたける

なりけり。濁悪の世にしも生れあひて、かゝる心うき

わさをなん見侍し。又、いと哀なる事侍りき。去かたき

妻夫など持たるものは、其こゝろさしまさりてふかきは、

かならず先立て死す。其故は、我身を次にして、男にも

あれ女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たま〜乞得たる物

をもまつかれにゆつるによりて也。されは、親子ある者は、さたま

れる事にて、親そさきたちて死にける。父母か命尽て

ふせるをもしらすして、いとけなき子か、猶其ちふさをすい

つゝふせるなともありけり。仁和寺に隆暁法印といふ人、

かくしつゝ数もしらす死する事を悲しみて、聖をあ

またかたらひつゝ、其かうへの見ゆることに、阿字を書て

縁を結はしむるわさをなんせられけるに、其人数をしらんとて、四五両月か程かそへたりければ、京の中、一条より南、九条より北、京極より西、朱雀より東まで、道のほとなりなるかうへ、すへて四万二千三百余なん有ける。いはんや、其前後に死する者多く、河原、白河、西の京、もろくの辺地などを加ていは、際限も有へからず。いかにいはんや、七道諸国をや。ちかくは崇徳院御位のととき、長承の比かとよ、かゝるためしは有けるとときけとも、其世のありさまはしらす。まのあたり、いとめつらかなしかりし事也。

「 7 才

○又、元暦二年七月九日、おひたしく大地ふるひうこく事

侍りき。其さま、よのつねならず。山はくつれて河をうつみ、海はかたふきて陸をひたせり。土さけて水わきあかり、いはをわれて谷にまるひ入。渚こく船は浪にたよひ、道行駒は足のたてとをまとはせり。いはんや、都のあたりには、

在々所々に堂舎塔廟一として全からず。或はくつれ、或は

「 7 ウ

たふれたる間、塵灰立のほりてさかりなる煙のことし。

地のふるひ、家の破るゝ音、いかつちにことならず。家の内に居れば、たちまちに打ひしげなんとす。はしり出れば、又地裂破る。羽な

ければ、空へもあかるへからず、龍ならねは、雲にのほらん事
 かたし。おそれの中におそるへかりけるは、たゞ地震なりけり
 とそ覚え侍し。其中に、ある武士の独子の、六七はかりに侍しか、
 ついひちのおほひの下に小家を作りて、はかなけなる跡なしこと
 をしてあそひ侍しか、俄にくつれうめられて、跡かた
 なくひらに打ひさかれて、二の目なと一寸計打出され
 たるを、父母かゝへて、声もおします悲しみあひて侍し

こそ、哀にかなしく見侍しか。子のかなしひには、たけき者も
 恥を忘れけりと覚えて、いとおしく、ことほりかなとそ見侍し。

かくおひたゞしくふるう事は、しはしにてやみにしかとも、
 其余波、しはくたえす。よのつねにおとろく程の地震、二三
 十度ふるはぬ日はなかりし。十日廿日過にしかは、漸まと
 をになりて、或は四五度、二三度、若は日こと、日ませ、二三日に一
 度など、大かた其余波三月計や侍けん。四大種の中に、水火
 風は常に害をなせとも、大地に至りてはことなる変をな
 さす。昔、齊衡の比かとよ、大地ふるひさけて、東大寺の仏の
 御くしおちなとして、いみしき事とも侍りけれとも、なを
 此度にはしかすとそ。則、人皆あちきなき事をのへて、いさゝか

心のにこりもうすらけるか見えしかとも、月日重りて年越
 後は、ことのはにかけていひ出る人もなし。すへて、世のありにく
 き事、我身と栖とのあたなるさま、かくのことし。いはんや、所により
 身の程にしたかひて、心をなやます事は、あけてかそふへからず。
 もし、をのれか身数ならすして、権門のかたはらに居る者は、
 ふかくよろこぶ事はあれとも、大にたのしむ事あたはず。歎き
 切なる時も声をあけてなく事をはゝかり、進退やすか

らす、立居につけても恐れおのゝくさま、たとへは雀の鷹の
 巢に近付るかことし。もし、貧くして、とめる家の隣に
 居る者は、朝夕すほき姿を恥て、へつらひて出入。妻子
 とうほくのうらやめるさまを見るにも、富る人のないかしろ
 なるけしきを見るにも、心念くうこきて、時としてやす
 からず。もしせはき地に居れば、近く炎上ある時、其わさはひ
 をのかるゝ事なし。もし辺地に居れば、往反煩おほく、盜
 賊の難はなれかたし。又、いきほひある者はとんよくふかく、
 独身なるものは人にかろしめらる。財あれば恐おほく、まつし
 ければなけき切なり。人を頼めは、身他の奴となり、人をはこ
 くめは、心恩愛につかはる。世にしたかへは、みくるし、又、したかは

されは、くるへるに似たり。いつれの所をしめ、いかなるわさをしてか、しはらくも此身をやとし、玉ゆらも心をなくさむへき。

我身、ちゝかたのうはの家をつたへて、久しく彼所にすむ。

そのゝち、縁かけ、身おとろへて、しのふかたくしけかりしかは、つゐに跡をとゝむる事を得ずして、三十余にして、さらに

「 9ウ

我心と一つの庵りを結ふ。是をありし住家になぞらふるに、

十分か一なり。たゝ居屋計をかまへて、はかくしき

屋を作るに及はず。わつかに築地をつけりといへとも、門を

たつるにたつきなし。竹を柱として、車やとりとせり。

雪ふり風ふくことに、あやうからぬにしもあらず。所は河原近

ければ、水の難もふかくして、白浪の恐れもさはかし。すへて、

あらぬ世を念しすくしつゝ心をなやませる事、

三十余年也。其間、折くのたかひめに、をのつからみし

かき運をさとりぬ。則、五十の春をむかへて、家を出、世を背

けり。もとより妻子なければ、捨かたきやすかもなし。

身に官禄あらず、何につけてか執をとゝめん。空しく

「 10オ

大原山の雲にふし、又、五かへりの春秋をなん経にける。

爰に、六十の露消かたに及ひて、さらに末葉のやとり

を結へる事あり。いはゞ、狩人の一夜のやとりを作り、老たるかいこのまゆをいとなむかことし。是を中比の住家になそらふれば、又、百分か一にたにも及はず。とかくいふほとに、よはひは中く／＼にたかく、栖は折く／＼にせはし。其家の有さま、よのつねに似す。ひろさわつかに方丈、高さ七尺か中也。

所を思ひ定めざる故に、地をしめて作らず。土居をくみ、打おほひふきて、つきめことにかねを懸たり。もし

心に叶はぬ事あらは、やすく外にうつさんか為也。其あらた

め作る時、いくはくのわつらひかある。つむところ、わつかに二両也。

「 10ウ

車の力むくふ外には、更に他の用途いらす。今は日野山の奥に

跡をかくして、南に仮の日かくしをさし出して、竹すのこ

をしき、其西にあかたなを作り、中には西の垣にそへて、爰に

よせて障子をへたて、阿弥陀の絵像を安置し奉りて、

落日を請て眉間の光とす。彼帳の戸ひらに普賢并に

不動の像をかけ、前に法華経を置り。北の障子の上にちいさ

き棚をかまへて、くろきかはこ三四合をおく。則、和歌、

管絃、往生要集こときの抄物をいれたり。かたはらに、琴、琵琶

各一張をたつ。いはゆるおり琴、つき琵琶是なり。東に

そへてわらひのほとろをしき、つかなみを敷て、夜の床とす。東の垣に窓をあけて、爰にふつくゑを作り出せり。まくらのかたにすひつあり。是を柴折くふるよすか

「 11才

とす。庵りの北に少地をしめ、あはらなるひめかきをかこひて園とす。則、諸の菓草を栽たり。かの庵のあり

さま、かくのことし。もし其所のさまをいは、南に筧あり。石をたゝみて水をためたり。はやし軒近ければ、爪木をひろふにともしからす。名を外山といふ。まさきのかつら、跡をうつめり。谷しければとも、西は晴たり。観念の

たより、なきにしもあらず。春は藤なみをみる。紫雲のことくにして、西の方に匂ふ。夏は子規をきく。かたろふことに、しての山路を契る。秋は日くらしの声耳にみたり。

240 かたろふ Ⅱ 「ら」を「ろ」と誤写。

「 11ウ

うつせみの世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪をあわれむ。積消るさま、罪障にたとへつへし。もし、念仏物うく、読経まめならさる時は、みつからやすみ、みつからおこたるに、さまたくる人もなく、又、恥へき友もなし。殊更に無言せされとも、独居れば、口業をおさめつへし。かならず禁戒をまもるとしもなければとも、境界なければ、何につけてかやふらん。

もし跡の白浪に身をよするあしたには、岡のやに行かふ
舟をなかめつゝ、満沙弥か風情をぬすみ、もしかつらの風
葉をならす夕には、しんやうの江をおもひやりて、
源都督のなかれをならふ。もし余興あれば、しはく松の
ひゝきに秋風の楽をたくへ、水の音に流泉の曲をあや

つる。芸はこれつたなければ、人の耳をよろこはしめんと
にもあらず。独しらへ、ひとり詠して、みつから心をやし

なふ計也。又、ふもとに一つの柴の庵りあり。則、この山守か
居る所也。かれに十歳はかりなる小童あり。時く

来てあひとふらふ。もしつれくなる時は、是を友と

してあそひありく。かれは十歳、是は六十、其よはひこ

となれとも、心をなくさむ事は是同し。或はつはなをぬき、

岩なしをとり、又、ぬかこをもり、芹をつむ。或はすそわ

の田井にいたりて、おちほをひろひて、ほくみをつくる。もし

日うらゝかなれば、嶺によちのほりて、はるかに故郷の空を

のそみ、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽羽東師をみる。勝地はあるし

なければ、心をなくさむにさはりなし。あゆみわつらひ

なく、こゝろさしとをくいたる時は、是より嶺つゝき、炭

「 12 才

「 12 ウ

山をこへ、かさとりをすきて、岩間にまうて、石山を拝す。
 もしは又、栗津のはらを分つゝ、蟬丸の翁か跡をとふらひ、田上
 河をわたりて、猿丸大夫か墓を尋ぬ。帰るさには、折に
 つけつゝ、さくらをかり、もみちをもとめ、わらひを折、このみ
 をひろひて、かつは仏にたてまつり、かつは家つとゝす。もし
 夜しつかなる時は、窓の月に故人を忍ひ、猿の声に

袖をうるほす。草村の螢は、遠く真木の嶋のかゝり火
 にまかひ、暁の雨は、をのつから木の葉吹あらしに似

たり。山鳥のほろくくと啼を聞ても、父か母かとうたかひ、
 峯のかせきの近付なれたるにつけても、世に遠さかる
 ほとをしる。或時は、うつみ火をかきおこして、老の寢覚の

「 13才

友とす。おそろしき山ならねは、ふくろふの声をあはれむ
 につけても、山中の景気は折につけつゝつくる事なし。

いはんや、深く思ひ深くしれらん人のためには、是らにし
 もかきるへからず。大方、此所に住そめし時はあからさまと
 思ひしかと、今すてに五とせを経たり。かりの庵り

も漸古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。

をのつからことのたよりに都をきけは、此山に籠りゐて後、

やんことなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして、其
 数ならぬたくひ、つくして是を知へからず。度／＼の炎上
 にほろひたる家、又、いかはかりそ。たゞかりの庵りのみ
 のとけくして、おそれなし。ほどせはしといへとも、夜るふす
 床あり、ひる居る坐あり。一身をやとすにたらずと

「 13
ウ

いふ事なし。かうなはちいさきかいをこのむ。是、よく身
 をしるによりてなり。みさこはあらいそにゐる。是、人を
 おそるゝ故也。我も又、かくのことし。身をしり、世をしれば、
 ねかはす、ましらはす。たゞ、静なるをのそみとし、うれへ
 なきを樂みとす。すへて、世の人のすみかを作るならひ、
 かならずしも身のためのみにせず。或は妻子眷属の為に
 作り、或は親昵朋友のために作る。或は主君師匠及び
 財宝牛馬の為にさへ、是を作る。われいま、身のために
 結へり。人のために作らず。故いかんとなれば、今の
 世のならひ、此身の有様、友なふへき人もなく、頼へき奴
 もなし。たとひひろく作れりとも、誰をかやとし、誰をかす
 へむ。それ、人の友たる者は、とめるをたふとみ、ねんころ
 なるを先とす。かならずしも、なさけあると、すなを

「 14
オ

299
○れ || 本文と別筆か。

なるとをは愛せず。只、糸竹、花月を友とせんには
 しかす。人のやつこたるものは、賞罰はなはたしく、恩顧あ
 つきをおもく、更に、はこくみあはれむと、やすく静なる
 をはねかはす。たゞ、我身を奴婢とせんにはしかす。いかゞ
 我身を奴婢とせんとならば、もしなすへき事あれば、
 則、をのれか身をつかふ。是、たゆからずしもあらねと、人
 をしたかへ、人をかへりみるよりはやすし。若行へき事

「 14ウ

あれは、みつからあゆむ。くるしといへとも、馬鞍牛車と心をなや
 ますには似す。今、一身をわかつて二つの用をなす。手の
 やつこ、足ののりもの、よく我心にかなへり。心、又、身のくるし
 みをしれは、くるしむ時はやすめ、まめなる時はつかふ。つかふ
 といへとも、度くすくさす。ものうしとても、心をうこかす事
 なし。いかにいはんや、常にありき、常にはたらくは、是、養性
 なり。なんそいたつらにやすみをらん。人をくるしめ、人をなや
 ますは、又、罪業也。いかゞ他のちからをかるへき。衣食のたくひ、又
 同し。藤の衣、あさのふすま、うるにしたかひてはたへをかくし、
 野辺のつはな、嶺のこのみ、わつかに命をつくはかりなり。
 人にましはらされは、姿を恥る悔もなし。かくともしければ、

「 15オ

をろそかなれとも、猶味をあまくす。すへて、かやうの事、たのしみ、とめる人にたいしていふにはあらず。只、我身一つにとりて、昔と今となそらふるはかり也。大かた、世をのかれ、身を捨しより、うらみもなく、おそれもなし。命は天運に任せて、おします、いとほす。身をは浮雲になそらへて、頼

ます、またしとせず。一期のたのしみは、うたゝ寝の枕の上にはきはまり、生涯の望みは、折くの美景にのこれり。

夫、三界は唯心の一なり。心もしやすからすは、象馬七珍もよ

しなく、宮殿楼閣も望みなし。今、さひしき住家、一間の庵り、みつからはを愛す。をのつから都に出ては、身の骨

骸となれる事を恥といへとも、かへりて爰におる時は、他の俗塵に着する事をあはれむ。もし人、此いへる事を疑はゝ、

魚と鳥との有様を見よ。魚は水にあかす。魚にあら

されは、其心をしらす。鳥は林をねかふ。鳥にあらされは、

其心をしらす。閑居の気味も又、是に同し。すますしては

誰かさたらん。抑、一期の月影かたふきて、余算山の端に

近し。たちまちに三途のやみにむかはん時、何のわさをか

かこたんとする。仏の人をおしへ給ふ趣は、事にふれて

執心なかれと也。今、草の庵りを愛するもとかとす。寂靜に著するもさはりなるへし。いかゞ、用なき樂しみをのへて、むなしくおしむへき時をすこさん。しつかなる暁、此理りを思ひつゝけて、みつから心に問ていはく、世をのかれ、山林にましはるは、心をおさめつゝ道をおこなわんため也。しかるを、

「 16才

なんちか姿はひしりに似て、心はにこりに染り。栖はなましるに浄名居士の跡をけかせりといへとも、たもつ所は、わつかに周利盤特か行にたにも及はず。もしこれ、貧賤のむくひのみつからなやますか、将又、妄心のいたりてくるわせるか、と。其時、心さらにこたふる事なく、たゞ、かたはらに舌根をやとひて、不請の念仏二三返申て、やみぬ。

348
ゼツ||本文と別筆。

于時建曆の二とせ^壬申弥生の晦日の比、桑門蓮胤、外山の庵にして、是をしるす。

月影はいる山の端もつらかりき
たえぬ光をみるよしもかな

「 16ウ

この方丈の記は、摂州富田の里
藤田彩雲翁友閑筆跡なり。抑、翁は

年老るまで筆の道を学はず。ある時、
 其令正諫て曰、旅行又他行などのおり
 から事を欠らめ。くゆるとも及はし、との
 一言に迫りて、今より学ひても事

業なるへきやといへは、なるもならぬも

汝のこゝろなり。問ていふ、今、天下の能書
 は誰ならんや、と。そのころ、南山松花堂

いましぬ。三里の遠を日々往来し、三年

の間まなひし。かくて、初終二十年の修行

怠らす。後、絵かく事までも学ひ、又、哥を

詠し、後の世の手本となりぬ。これを

ます女、予に鑑定をこふ。傍に、

需にまかせて百か一をしるすなり。

寛政六年丙寅南呂吉 八十翁白亭記之矣

【校異】 伝藤田友閑筆写本と正保版本・学習院大学本

- ・行番号とともに伝友閑筆本の本文を掲げ、それと異なる本文が正保版本・学習院大学本に見られる場合、それを棒線の下に掲げた。
- ・振り仮名や濁点の有無、仮名遣いや送り仮名のあり方、漢字・仮名の宛て方についての相違は、基本的に校異として取り上げていない。
- ・「正」は正保版本の、「習」は学習院大学本の、各々略称である。「ナシ」は、対応する本文がないことを示す。学習院大学本のまともった脱文と見られる場合には、「ナシ」を□で囲んだ。

『広本略本方丈記総索引』に載る、正保版本・学習院大学本を含む計十七本のいずれとも異なる伝友閑筆本の本文には、波線を施した。『広本略本方丈記総索引』に載る計十七本の中での学習院大学本の独自異文と一致する伝友閑筆本の本文には、二重傍線を施した。それらはすなわち、伝友閑筆本を加えた計十八本のうち、同本と学習院大学本とのみが共有する本文ということである。

以下に掲げる学習院大学本の本文のうち、『広本略本方丈記総索引』に載る計十七本の中での同本の独自異文には、実線を施した。それらは、学習院大学本の計十七本内における独自異文のうち、伝友閑筆本の本文とは一致しない本文ということになる。

- 3 水には―水に (正) 5 とゝまる―とまる (正) 5 又―ナシ (習) 7 いやしき―ナシ (習) 7 栖―すまる (正)
 すまひ (習) 9 或はこそやけてことし作り―ナシ (正) 9 ほろひて―ほろひ (習) 10 かはらす―かへす (習) 13
 泡にそ―泡に (正) 13 生れ―生し (習) 13 死する―しぬる (正) 14 来りて―来て (習) 15 誰かために―たれかた
 めにか (習) 15 よりてか―よつてか (習) 16 あらそへる―あらそひ去 (正) 18 残れり―ナシ (習) 18 朝の日―朝
 日 (習・正) 18 花は―花 (習) 19 猶―ナシ (習) 19 きえすといへとも―といへとも (習) 19 夕―暮 (習) 20 凡―
 予 (習) 20 しれりし―しりし (習) 20 送れる―送る (正) 22 去―去さりぬる (正) さんぬる (習) 22 はけしう―はけし

く(正) 23時一刻(習) 23はかりに—はかり(正) 23巽—東南(習) 23出来りて—出来て(習) 24乾—西北(習)
24はてには—つゝみには(習) 25一夜のほと—一夜が程(正) 一夜の中(習) 25塵灰—灰(正) 26出来りける—出来
ける(正・習) 27吹まよふ—吹まきれ(習) 27とかく—とかう(習) 28ことく—ことく(正・習) 28末ひろ
こり—すゑびろ(正) 29ひたすら—ひた空(習) 29ほのほ—ほのほを(正) ナシ(習) 29地—軒(習) 30吹たて
たれは—ふきたつれは(習) 31くれなゐなる中に—紅なり(習) 31たえす—堪す(正) 32ことくにして—ことくし
て(習) 32二町—二三町(習) 33うつし心—うつゝころ(正) 33煙—ほのほ(習) 34ふし—ふす(習) 34死
す—死ぬ(正) 35又—ナシ(習) 35からうして—からくして(正) 35のかるゝといへとも—のかれたれとも(正)
36取出る—とりいたす(習) 36さなから—しかしながら(習) 37いくそはくそ—いくはくそ(習) 37此度—今度
(習) 37公家—公卿(正・習) 38かそふるに及はず—かずしらす(正) かそふるにいとまあらず(習) 38都の中す
へて—すべて都の中(正) 39及へりとそ—をよへり(習) 39死する—死ぬる(正) 39数千人—数十人(習) 39牛
馬—馬牛(正) 40皆—ナシ(習) 41中にも—中に(正・習) 41財—宝(正) 42あちきなく—あちきなくそ(正)
42侍し—侍るべき(正) 43廿九日—廿九日の比(正) 廿九日に(習) 44おこりて—おこつて(習) 44あたり—わた
り(正・習) 44いかめしう—いかめしく(正) 44ふける—吹きける(正) 46すこしき—ちいさき(正・習) 47た
いらに—ひらに(正) 48上—とひら(習) 50資財は—たから(正) 50あかり—あり(習) 50たくひは—たくひ
(正・習) 51冬の—をのく(習) 51ことし—ことく(習) 52吹たてければ—吹たてたれは(正・習) 53をと—程
(習) 53かの—ナシ(正) 54か計にこそ—かくこそは(正) 54家の—家を(習) 54損亡する—損亡せる(習) 54
のみにあらず—のみならず(正) 55かたわをつく—かたはつける(正) 56人は—もの(正) 56数を—数も(習)
56此風の—此風(正・習) 57歎となれり—歎をなせり(正) なけきとなれり(習) 57なれと—なれとも(習)

58 あらず、さるへき—あらさるへき(習) 59 にや—かな(正・習) 60 同年の—おなし年の(正) 同年(習) 60 都移
 りと—都遷(正) 61 桓武天皇—嵯峨天皇(正) 桓武帝(習) 62 さたまりし—さたまりにける(正) さためにつける
 (習) 62 ことなる故—こと(正) 63 なくして—なくて(正・習) 63 へくもあらねは—へからねは(習) 64 たやすか
 らす—やすからす(習) 64 うれうる—愁あへる(正) 65 されとも—されと(正) 65 とかく—とかう(習) 65 いふ
 かひ—いひかひ(習) 65 初め—始まいらせ(習) 66 皆—ナシ(正) 66 程の—ナシ(習) 66 人—人の(習) 66 誰か
 は—誰か(正) 67 残りおらん—残らむ(正) 67 官位にも—官位に(正) 68 かけをも—影を(正) 68 はけまし—は
 けみ(正) 70 なからも—なから(正・習) 70 とゝまり居—とまりをり(正) とゝまりをる(習) 71 栖か—すまゐ
 (正) 71 あれゆき—荒行(正) あれゆく(習) 71 こほたれ—やふれ(習) 72 なる—なり(習) 72 あらたまりて—あ
 らたまつて(習) 72 只—ナシ(習) 72 馬鞍をのみ—馬くらのみを(習) 73 おもくして—をもくす(正) 73 用る人
 —用とする人(正) 用人(習) 73 願ひ—願ひて(習) 74 みつから—をのつから(正) 75 摂津国—つのくに(習)
 76 せはくして—せはくて(正) 76 わる—わかる(習) 76 山に傍て—山そひへ(習) 77 海に—海(習) 77 近くして
 —近くて(正) ちかうして(習) 77 かしかましくして—かまひすしくて(正) かまひすしくて(習) 78 殊に—ナ
 シ(習) 78 はけし—はけしく(正) 79 侍りき—侍り(習) 79 日毎—日々(正・習) 80 せきあへす—せに(習) 80
 くだす—いたす(習) 80 いつこ—いつく(正) 81 作る—造れる(正・習) 82 故郷—古郷(正・習) 82 ならず—な
 らすして(習) 83 もの—人(正) 85 道のほとり—道の辺(正) 86 人—ナシ(正) 86 おほく—ナシ(正) 86 ひたた
 れ—なをし(習) 87 てふり—条里(正) 88 みたる—乱る(正) 89 とか—と(習) 89 世中の—世中(正) 89 うき
 たちて—うきたつて(習) 90 うれへ—うれい(習) 90 空しからされは—むなしからさりければ(正・習) 90 同き年
 —同年(正・習) 91 十一月廿六日に—ナシ(正) 十一月廿六日(習) 91 帰り—なを此京に帰り(正・習) 91 されと

も—されと (正) 92 家ともは—家共 (正) 92 成にける—成ける (習) 93 つたへきくに—ほのかに伝へ間に (正) 伝
 聞 (習) 94 もて—もつて (習) 94 給ふ—ナシ (正) 94 ふきて—ふかれ (習) 94 のきをたも—軒を (習) 95 煙の—
 けふり (習) 95 ともしき—とほしき (習) 95 時は—時には (習) 96 ゆるされき—まぬかれてし (習) 96 よりて—
 よつて (習) 97 世—世中 (正) 97 昔—かや (習) 97 なそらへて—なずらへて (正) 98 二とせの—二年か (正) 99
 飢餓—世の中の飢渴 (習) 99 春夏の—春夏 (正) 99 或は秋冬の—或は秋冬 (正) 秋冬の (習) 100 打つゝきて—打
 つゝき (正) 101 みのらす—ならず (習) 101 うふる—うゆる (習) 101 のみ—ナシ (習) 102 ありて—あり (習) 102 そ
 めきはなし—義なし (習) 102 よりて—よつて (正・習) 103 捨て—すてゝ (正) 捨 (習) 103 出—いてゝ (習) 103 或
 は家を—或家を (習) 103 忘れて—忘 (習) 103 様—の—様々 (正) 105 なにはに—なにわさに (習) 106 田舎を—田
 舎 (習) 106 なへて—絶て (正) 107 わひつゝ—わひつる (習) 108 さまく—の—ナシ (正) 108 財物—宝物 (正) 108 す
 つるかことく—捨るごとく (正) すつるかことくに (習) 109 人も—人 (正) 109 かはる—かふる (正) 110 道のほとり
 —道のべ (正) 111 かなしむ—悲しふ (正) 111 先—まへ (習) 111 かくのことし—かくのことく (正) 111 からうして
 —からくして (正) 111 暮ぬ—暮 (習) 112 年—年寿永元_寅年 (習) 112 たちなをる—たてなをる (習) 112 へき—ナシ
 (習) 112 おもふに—思ふほとに (習) 112 あまつさへ—あまさへ (正) 112 疫癘—ゑやみ (正) 112 うちそひて—うちそ
 ひ (習) 113 まさるさま—すくれさま (習) 113 やみ死にければ—飢死ければ (正) 114 きはまりゆくさま—
 ナシ (習) 114 小水—少水 (正) 115 ひきつゝみて—ひきつゝみ (正) 116 ひたすら—ひたそらに (習) 116 家—ことに—
 ナシ (習) 116 ありく—ゆく (習) 116 かく—
 117 ありくか—ナシ (習) 118 死す—死ぬ (正) 119 数も—数 (正) 119 なければ—し
 —路頭 (正) 118 死する—死ぬる (正) 118 死たる (習) 118 たくひは—たくひ (習) 119 数も—数 (正) 119 なければ—し
 120 みち—く—て—みち—く—たり (習) 120 あてられす—あてられぬ事おほかり (正) 120 河原—いはむや川

原(正) 溝や河原(習) 121 往かふ—行ちかふ(正) 122 薪にさへ—薪さへ(習) 123 なき人は—なくなり(習) 123 こ
 ほちて—こほつて(習) 124 持たる—持出ぬる(正) もたる(習) 124 一日の—一日か(正・習) 124 命をささふるたに
 も—命をささふるにたに(正) 命にたにも(習) 124 及はすとそ—及はす(習) 125 爰に—ナシ(正) 125 丹つき、白銀、
 金のはく—丹(習) 126 木のわれ—木あまた有て(習) 127 せんかた—すへき方(正) 127 もの—ものゝ(正) 127 古寺
 —古き寺(正) ふるき寺(習) 128 破り取て—わりとつて(習) 128 わりくたけるなりけり—わりくせる也(習) 129 し
 も—ナシ(習) 130 侍し—侍りき(正) 130 いと—ナシ(正) 130 事—事も(習) 130 去かたき—さりかたく(習) 131 妻
 夫—女男(正) 131 持たる—もちたる(習) 131 ものは—者(習) 131 こゝろさし—思(習) 131 ふかきは—ふかきもの
 は(習) 132 先立て—ナシ(正) 132 死す—死しぬ(習) 132 我身を—我身をは(正・習) 132 して—なして(正) 132 男
 にもあれ女にもあれ—人を(習) 133 かた—ゆへ(習) 133 たまく—まれに(習) 133 乞—ナシ(習) 133 物—食物
 (習) 134 をも—を(正) 134 かれに—ナシ(正) 134 よりて—よつて(習) 134 親子—父子(正) 135 親そ—親を(習)
 135 さきたちて死にける—さきには立ける(習) 135 尽てふせるをも—つきてふせるを(正) つきたるを(習) 136 しら
 すして—しらす(習) 136 子か—子の(正) 136 猶其—その(正) なを(習) 136 ちふさを—乳房に(正) 136 すい—す
 ひつき(正) 137 仁和寺に—仁和寺(習) 138 数も—数(正) 138 死する—死ぬる(正) 139 かたらひつゝ—かたらひて
 (習) 139 かうへ—死首(正) 139 見ゆる—みる(習) 140 せられけるに—せられける(正) 140 其人数—其数(正) 人数
 (習) 141 京の中—京中(習) 142 東まで—東(正) 142 道のほとり—道の辺(正) 道のかたはら(習) 143 なる—にある
 (正) 143 かうへ—頭(正) 144 死する—死ぬる(正) 144 者—ものも(正) 事(習) 144 河原—又川原(習) 144 西の京
 —西京(習) 145 加ていはゝ—加へては(習) 145 際限も—際限(習) 145 いかに—ナシ(習) 145 七道諸国—諸国七道
 (正) 146 崇徳院御位—崇徳院の御位(正) 146 かとよ—とかや(習) 147 ためしは—ためし(習) 147 きけとも—聞と(正)

148 めつらかなしかりし—めつらかなりし (習) 149 又—又同比 (習) 149 元曆二年七月九日—元曆二年の此 (正)
 建久元年七月九日 (習) 149 おひたゝしく—ナシ (正) いとおひたゝしく (習) 149 大地ふるひうこく—大なるふる
 (正) 150 よのつね—つね (正) 150 山は—山 (正) 150 うつみ—うつめ (習) 151 海は—海 (正) 151 かたふきて—かた
 ふいて (習) 151 陸—陸地 (習) 151 わきあかり—わきいて (習) 152 われて—やふれて (習) 153 たてと—立と (正)
 たてところ (習) 153 あたり—ほとり (正) 154 在々所々に—在々所々 (正) 155 たふれたる間—たふれ又 (習) 155 塵
 灰—塵灰と (習) 155 立のほりて—立上りて (正) のほつて (習) 155 さかりなる—さかんなる (習) 156 地の—地 (習)
 156 ふるひ—うこき (習) 156 家の破るゝ—家やふるゝ (習) 156 家の内—家中 (正) 屋のうち (習) 156 居れば—をれ
 は (正) めれば (習) 157 打ひしけなん—ひしけなん (習) 157 裂破る—われさく (正) 158 空へも—空をも (習) 158
 あかる—とふ (習) 158 ならねは—ならはや (習) 158 事かたし—ナシ (習) 159 たゝ—ナシ (習) 160 其中に—見侍
 し—ナシ (習) 160 ある—有 (正) 160 武士—武者 (正) 165 かなしひ—かなしみ (正) 167 おひたゝしく—おそろしく
 (習) 167 ふるう—ふる (正) 167 やみにしかとも—やみにしが (正) 168 余波—名残 (習) 168 地震—事 (習) 169 ふる
 はぬ—ふらぬ (正) 169 なかりし—なし (正) 169 十日—十月 (習) 170 二三度—ナシ (習) 170 日こと—ナシ (正) 170
 日ませ—日ませ (正) 171 など—ナシ (習) 171 余波—名残 (正・習) 171 計や—はかり (習) 172 なせとも—なせと
 (正) 172 至りては—いたつては (習) 173 かとよ—とかや (習) 173 大地ふるひさけて—大地震ふりて (正) 174 おちな
 として—おちなんぞす (習) 174 侍りけれとも—侍りけれと (正) 侍りなんも (習) 174 なを—ナシ (習) 175 此度—い
 まのたひ (習) 175 しかす—しかし (習) 175 則—ナシ (習) 176 にこりも—にこり (習) 176 うすらける—うすらく
 (正) 176 見えしかとも—みし程に (正) 176 重りて—かさなり (正) かさなつて (習) 176 越—越しかば (正) こえに
 し (習) 177 ことのは—こと葉 (習) 177 かけて—かけても (習) 177 人も—人たに (正) 177 ありにくき事—ありにくゝ

(習) 178 栖との—栖と (習) 178 あたなる—はかなくあたなる (正・習) 179 したかひて—したかつて (習) 179 事は—
 事 (正) 180 をのれか—をのづから (正) 180 数ならず—叶はず (正) 181 よろこふ事は—悦事 (習) 181 たのしむ事—
 楽しふに (正) 182 切なる—ある (正) 182 事をは—かり—事なし (正) 183 つけても—つけて (正) 183 さま—ナシ
 (正) 184 近付る—近づける (正) 近付 (習) 184 貧くして—貧にして (習) 184 家—者 (習) 185 居る者は—をるものは
 (正) ゐれば (習) 185 へつらひて—へつらひつゝ (正・習) 186 どうほくの—僮僕 (習) 186 人—家の人 (正) 187 みる
 —聞 (正) 187 念く—に—念に (習) 188 居れば—ゐれば (習) 188 近く—居れば—ナシ (習) 188 ある—する (正)
 188 わさはひ—害 (正) 189 居れば—あれば (正) 190 又—ナシ (正) 191 独身—ひとり身 (正) 191 かるしめ—かるしめ
 (正) 191 財—宝 (正) 192 なけき—うらみ (習) 193 又—ナシ (習) 193 したかはされは—したかはねは (正) 194 くる
 へる—狂せる (習) 194 いつれの—いかなる (習) 194 いかなるわき—なにわき (習) 195 しはらくも—しはしも (正)
 195 心を—心の (習) 195 なくさむ—やすむ (習) 196 うは—祖母 (正) 197 かたく—しけかり—かたく侍り (習) 198 跡
 を—跡 (正) 198 とゝむる—とむる (正) 198 得すして—えす (習) 199 住家—住居 (正) 199 なそらふる—なずらふる
 (正) 200 はかく—しき—はかく—しくは (正) はかく—しく (習) 201 門を—門 (正) 202 たつるに—たつる (習) 202
 たつきなし—義なし (習) 202 車やとりとせり—車をやとせり (習) 203 あやうからぬに—しも—あやうからずしも (正)
 あやうからぬにも (習) 204 難も—難 (正) 204 ふかくして—ふかく (正) 205 事—事は (正) 207 五十一—六十 (習) 207
 むかへて—むかへ (習) 207 出—出て (習) 209 身に—身 (習) 209 つけてか—付ても (習) 209 とゝめん—とゝめんや
 (習) 210 ふし—ナシ (正) 210 又、五かへり—いくそばく (正) 210 春秋をなん—春秋をか (正) 210 経にける—へぬる
 (正) 211 消かた—消かたき (習) 211 やとり—宿 (習) 212 狩人—旅人 (習) 212 やとり—宿 (正) 212 老たる—をきた
 るかことし (習) 213 まゆ—眉 (正) 214 なそらふれは—なすらふれは (正・習) 214 にたにも—にも (習) 215 よはひ

は—よはひ (習) 215 中く—toしくに (正) 215 たかく—かたふき (正) 216 つねに似す—つねならず (正) 216
 ひろさ—ひろさは (正) 216 高さ—たかさは (正) 216 中—うち (正) 217 定めさる—定めさるか (正) 218 打おほひ—
 打おほひを (正・習) 218 ふきて—ふいて (習) 220 二両—一両 (習) 221 力—力を (正) 221 むくふ—むくふる (正)
 221 外には—外は (正) ほとには (習) 221 更に—更 (習) 221 他の—ナシ (正) 221 今は—今 (正) 222 南—東 (習) 222
 飯の—三尺余の (習) 222 日かくし—ひさし (習) 222 さし出して—さして柴おりくふるよすかとす南に (習) 222 竹す
 の—竹のすのこ (正・習) 223 作り—作れり (習) 223 中には西の垣にそへて—ナシ (習) 223 爰に— 224 へたて—ナシ
 (正) 223 爰に—北に (習) 224 よせて—よりて (習) 224 へたて—へたてて (習) 224 絵像—画像 (正) 224 奉りて—
 彼帳の—ナシ (習) 225 戸ひら—そは (習) 225 并に不動の像—ナシ (習) 226 かけ—かけた (正) 226 前に法華経を置
 り—ナシ (正) まへに法花経ををけり東のきはに蕨ほとろをしきつゝよるの床とす (習) 226 北の障子の上—西南 (習)
 226 ちいさき棚—竹のつりたな (習) 227 かはこ—かはこを (習) 227 三四合を—三合 (習) 227 おく—置 (正) をけり
 (習) 227 則、和歌— 228 いたり—ナシ (習) 228 かたはらに—そはには (習) 229 各—をのく (正・習) 229 をたつ
 —ナシ (習) 229 東に— 234 栽たり—ナシ (習) 234 か—の—飯の (正) 234 ありさま—さま (習) 235 もし—ナシ (正) 235
 其所の—その (習) 235 さま—やう (習) 236 石—岩 (正) 236 ためたり—ためり (習) 237 まさきのかつら—みちまさ
 きのかつら (習) 238 跡を—跡 (習) 238 うつめり—埋めり (正) 238 しけれとも—しけれと (正) しけれとも (習)
 240 ことくに—ことく (正・習) 240 西の方—西方 (習) 240 匂ふ—匂ひ (習) 240 きく—きく (習) 240 かたろふ—かた
 らふ (正・習) 241 ことに—こと (習) 241 みてり—みち (習) 242 悲しむかと—かなしむと (正) 242 聞ゆ—きこえ
 (習) 243 たとへつ—たとふ (習) 243 物うく—うみ (習) 243 読経—転経 (習) 243 まめならさる—まめならぬ (習)
 244 おこたるに—おこたる (習) 245 友—人 (習) 245 無言—無言を (正) 246 居れは—をれは (正) むれは (習) 248 白

浪に—白波(習) 248 身—ナシ(習) 248 あしたには—あしたに(習) 249 なかめつゝ—なかめて(正) 249 風情—連情
 (習) 249 もし—ナシ(習) 250 葉—ばち(正) 250 おもひやりて—想像て(正) 思やり(習) 251 なかれ—行(習) 251
 余興—あまり興(正) 252 ひゝきに—ひゝき(正) 252 秋風の—秋風(習) 253 つたなければ—つたなければとも(習)
 254 ひとり—ナシ(習) 256 居る—ゐる(習) 256 かれ—かしこ(正) 256 十歳はかりなる—ナシ(正) 258 あそひありく
 —遊行す(習) 258 十歳—十六歳(正) 258 是—われ(正) 258 六十—むそぢ(正) 258 ことなれとも—ことの外なれと
 (正・習) 259 心を—心の(習) 259 なくさむ—慰る(正) 259 事は—事(習) 260 とり—とる(正) 260 つむ—つみ(習)
 260 すそわ—菌林(習) 261 いたりて—いたつて(習) 262 故郷—古郷(習) 263 鳥羽—ナシ(習) 263 あるし—主(正) 264 なくさむ—
 なくさむる(正) 265 嶺—峯(正・習) 266 かさとりを—笠とり(習) 266 岩間—あるひは岩間(習) 266 石山—あるひ
 は石山(習) 266 拜す—おかむ(正) 267 もしは—もし(習) 267 分つゝ—分て(正) 267 蟬丸の翁か跡—蟬丸か翁のあ
 と(習) 268 猿丸大夫か墓—猿麿大夫のはか(習) 268 尋ぬ—たつね(習) 268 帰るさ—かへりさま(習) 269 かり—お
 り(習) 270 家つとゝす—家つとにす(正) 271 しつかなる時は—しつかなれば(正) 271 故人—古人(正) 271 猿の声
 —猿声(習) 272 うるほす—うるほし(習) 273 木の葉—木葉を(習) 274 聞ても—聞て(正) 274 父か母か—父母か
 (習) 275 近付—近く(正) 275 つけても—つけては(習) 275 遠さかる—さかれる(習) 276 或時は—或は(正) ある時
 は又(習) 277 ならねは—ならねと(正) 277 声を—ナシ(習) 277 あはれむ—かなしむ(習) 278 景気は—景気(正)
 278 つけつゝ—つけても(正) 279 是ら—是(正) 281 今すてに—今迄に(正) 281 経たり—経(習) 282 漸—やゝ(正)
 282 軒には—軒に(習) 282 土居に—土居(正) 284 聞ゆ—聞え(習) 285 度く—の—度々(習) 286 いかはかりそ—いく
 そはくそ(正) 286 庵りのみ—身(習) 288 たらすといふ事—不足(正) 289 かい—ナシ(習) 289 よく—ナシ(習) 290

よりて—よつて (習) 290 是—則 (正・習) 291 故—によりて (正) 291 我も—我 (正) 291 しれは—しれらは (正) 292
 ましらはす—はしらす (習) 293 楽み—楽ひ (正・習) 294 ためのみに—ためには (正) 294 ためにのみ (習) 296 牛馬—馬
 牛 (正) 車馬 (習) 296 われ—ナシ (習) 296 いま—今は (習) 297 ために—ため (習) 297 なれは—ならば (習) 297 今
 の世—今此世 (習) 298 へき—ナシ (習) 299 やとし—やとすへき (習) 299 誰をかすへむ—ナシ (習) 300 たふとみ—
 たうとひ (習) 303 賞罰—賞罰の (正) 303 はなはたしく—はなはたしきをかへりみ (正) 303 恩顧—恩の (正) 304 お
 もく—おもくす (正・習) 304 あはれむと—あはれふといへども (正) 304 静なる—閑なる事 (習) 305 せん—する (正)
 305 しかす—しかし (習) 305 いか—我身を奴婢とせんとならば—ナシ (正) 306 なす—す (正) 307 則—ナシ (習) 307
 をのれか—をのつから (正) をのか (習) 307 是—ナシ (正) 308 人を—ナシ (習) 308 行—ありく (正) 309 いへとも
 —いへと (習) 309 馬鞍牛車—馬車 (習) 310 わかちて—わかつて (習) 311 のりもの—か (習) 312 しれは—しれらは
 (正) 312 やすめ—やすめつ (正) 312 まめなる時は—まめなれは (習) 313 といへとも—とても (正) 313 度く—度々
 に (習) 313 ものうしく 314 いかにか—ナシ (習) 314 ありき—ゆき (習) 314 はたらく—動く (正) 314 是—ナシ (習)
 315 なり—成へし (正) 315 をらん—ゐん (習) 316 いか—いかなか (習) 317 したかひて—したかひ (習) 317 かくし
 —かくす (習) 318 つはな—小萩 (習) 318 嶺—峯 (正・習) 318 わつかに—ナシ (正) 319 悔も—くい (習) 319 かく—
 かくて (正・習) 319 ともしければ—とほしく (習) 320 をろそかなれとも—をろそかなれは (習) 320 猶—法 (習) 321
 たのしみ—たのしく (正) 322 今と—今とを (正) 322 なそらふるはかり—たくらぶる (正) 322 大かたく 326 のこれり—
 ナシ (習) 324 なそらへて—なずらへて (正) 325 たのしみ—たのしひ (正) 327 唯心の—たゝ心一つ (正) 327 象馬
 —牛馬 (正) 327 よしなく—よしなし (正) 328 楼閣も—ナシ (正) 328 住家—住る (正) すまゐ (習) 329 出ては—出
 て (習) 329 身の—ナシ (正) 329 骨骸—乞食 (正) 330 なれる—なる (習) 330 かへりて—かへつて (習) 330 おる—居

- る (正) 331 着する―はしる (習) 331 あはれむ―あはれふ (正) 331 人―ナシ (習) 332 魚と鳥と―魚鳥 (正) 332 有様
 ―分野 (正) 332 あらされは―あらすんは (習) 333 あらされは―あらすんは (習) 334 是に同し―かくのごとし (正)
 334 すますしては―すますして (正) すますは (習) 335 さとらん―さとさむ (正) 336 何の―なに (習) 337 趣―おこり
 (正) 338 草の―ナシ (習) 338 寂靜に―閑寂に (正) 寂靜 (習) 339 著する―着する (正) 340 おしむへき―あたら (正)
 340 すこさん―過さむ (正) 341 問て―もんして (習) 341 のかれ―のかれて (正) 342 ましはる―ましはれる (習) 342
 おさめつゝ―おさめて (正) 342 おこなわんため―おこなはんかため (習) 343 なんちか―汝 (習) 343 姿は―ナシ (習)
 343 染り―しめり (正) そめり (習) 344 なましゝに―則 (正) 345 わつかに―猶 (習) 345 周利盤特―周梨槃特 (正)
 345 たに―ナシ (習) 346 むくひの―むくひ (習) 346 妄心―忘心 (習) 346 いたりて―いたつて (習) 346 くるわせるか、
 と―くるはせるか (正) 狂せるかと (習) 347 心―ナシ (習) 347 なく―なし (正) 348 やとひて―やとして (習) 348
 不請―不祥 (習) 348 念仏―阿弥陀仏 (習) 348 二三返―両三反を (正) 349 于時―時に (正) 349 建曆の―建曆 (習)
 349 申―ナシ (正) 349 弥生―三月 (習) 349 晦日の―晦日 (正・習) 350 にして―ナシ (習) 350 是をしるす―誌之 (習)
 351 月影はく 352 よしもかな―ナシ (習)

※右の校異は、『広本略本方丈記総索引』に基づいて作成したものであるので、同書に取り上げられていない伝本を視野に入れると当然、
 独自異文として傍線を施している本文も、独自のものだけでなくなる場合があったりする。例えば、「319 かく」の場合、伝友閑筆本の「か
 く」は『広本略本方丈記総索引』の範囲内では独自異文であるが、同書の対象外である冷泉家本でも同じく「かく」になっている。

【対照一覧】古本系統内学習院大学本独自異文と流布本系統本文および伝藤田友閑筆写本本文

- ・古本系統内での学習院大学本の独自異文（まとまった脱文除く）を、『広本略本方丈記総索引』の行番号とともに最上段に掲げた。
- ・古本系統の一例あるいは代表例として、大福光寺本の対応本文、あるいは必要に応じてそれ以外の伝本の本文を、二段目に掲げた。
- ・三段目には、最上段の独自異文と同じ本文が流布本系統本に共通して見られる場合は「○」、見られない場合は「×」と記した。流布本系統本の一部にのみ見られる場合は「△」として、見られる伝本の略称を（ ）内に示した。
- ・対比対象とする古本系統本も流布本系統本も、『広本略本方丈記総索引』に取り上げられたものにひとまず限定しておく。
- ・四段目には、最上段の独自異文と同じ本文が伝友閑筆本に見られる場合は「○」、見られない場合は「×」と記した。完全に同じでない場合などは「△」とした。また、該当箇所の行数を（ ）内に示し、必要に応じて伝友閑筆本の本文なども載せた。

総索引行番号 学習院大学本

大福光寺本等

流布本

伝友閑筆本（行数）

一	もとの水にはあらず	モトノ水ニアラス	×	○	(1)
五	たかき人	タカキイヤシキ人	×	×	(7)
八	ところもかへす	トコロモカハラス	×	×	(10)
一一	生し死する人	ウマレ死ル／生れしぬる人	×	×	(13)
一三	なにゝよつてか	ナニ、ヨリテカ	×	×	(15)
一五	はな残るといへとも	ハナノコレリノコルトイヘトモ	×	×	(17)

一六	露きえす	露ナヲキエス	×	×	(19)
一八	しりしより	シレリシヨリ	×	×	(20)
二〇	はけしう	ハケシク	×	○	(22)
二二	つゐには	ハテニハ	×	×	(24)
二六	吹まきれる	フキマヨフ	×	×	(27)
二六	とかう	トカク	×	×	(27)
二八	ひた空	ヒタスラ	×	×	(29)
二八	軒	地	×	×	(29)
二九	ふきたつれは	フキタテタレハ	×	×	(30)
三〇	紅なり	クレナキナル中ニ	×	×	(31)
三二	うつし心ならんや	ウツシ心アラムヤ	○	○	(33)
三二	ほのほ	煙	×	×	(33)
三二	たうれふす	タウレフシ	×	×	(33)
三三	忽に死す	タチマチニ死ヌ	×	○	(34)
三三	わつかに身ひとつ	身ヒトツ	○	○	(35)
三五	しかしながら	サナカラ	×	×	(36)
三六	今度	其ノタヒ／此度／この度	×	×	(37)
三七	かそふる	カソヘシル／かすへしるす	×	○	(38)

三七	いとまあらす	ヲヨハス	×	×	(38)
三七	都のうちすへて	惣テミヤコノウチ	×	○	(38)
四一	あちきなく侍りし	アチキナクソ侍ル	×	○	(42)
四二	四月廿九日	卯月ノ卯月十二日	○	△	(43)
四二	(四月廿九日)に	(卯月)ノコロ	×	×	(43)
四三	おこつて	ヲコリテ	×	×	(44)
四三	いかめしう	イカメシク	×	○	(44)
四五	たいらに	ヒラニ	×	○	(47)
四六	門のとひら	カトノ門のうへ	×	×	(48)
四七	四五町かほと	四五町カホカ	○	○	(48)
四九	資材は	資材	×	○	(50)
四九	をのく	冬の	×	×	(51)
五〇	ことく	如し	×	×	(51)
五三	おほえける	ヲホユルノおほえし	○	○	(54)
五三	家を	家ノ	×	×	(54)
五四	かたわを	片輪ノかたは	△	○	(55)
五四	つく	ツケル	×	○	(55)
五五	人は	人	×	○	(56)

(兼近京)

「侍し」
「卯月廿九日」

五六	なけきとななれり ^(衍)	ナケキナセリノ歎をなせり	×	○	(57)	衍字「な」ナシ
五七	あらさるへき	アラスサルヘキ	×	×	(58)	
五九	都うつりと侍き	ミヤコウツリ侍キ	×	○	(60)	
六〇	桓武帝	嵯峨ノ天皇	×	△	(61)	「桓武天皇」
六〇	さためにつける	サタマリニケル	×	×	(62)	
六二	あらたまるへからねは	アラタマルヘクモアラネハ	×	×	(63)	
六三	うれふる	ウレヘアヘル	×	○	(64)	「うれうる」
六三	とかういひかひなくて	トカクイフカヒナクテ	×	×	(65)	
六四	始まいらせ	ハシメ	×	×	(65)	
六五	人の	人	×	×	(66)	
六六	官位にも	ツカサクラキニ	×	○	(67)	
六七	はけまし	ハケミ	×	○	(68)	
六九	とゝまりをる	トマリヲリノとゝまりけり	×	×	(70)	
六九	すみか	スマヒノ栖居	×	○	(71)	「栖か」
七〇	やふれて	コホタレテノこほちて	×	×	(71)	
七一	あらたまつて	アラタマリテ	×	×	(72)	
七一	馬くらを	タノ馬クラヲ	×	×	(72)	
七一	のみを	ノミ	×	×	(73)	

七一	おもくして	ヲモクス	×	○	(73)
七二	用人	ヨウスル人／用いんとする人	×	△	(73)
七三	庄園をは	庄園ヲ	○	○	(74)
七三	みつから	ヲノツカラ	×	○	(74)
七五	ほとせはくして	ほとせはくて	×	○	(76)
七五	山そひて	山にそひて	×	×	(76)
七五	ちかうして	チカクテ／ちかくして	×	×	(77)
七六	はけし	コトニハケシ	×	×	(78)
七八	はこひいたす	ハコヒクタス	×	×	(80)
八一	ならすして	ナラス	×	×	(82)
八一	もの	人	×	○	(83)
八四	衣冠布衣なるへき人	衣冠布衣ナルへキ	×	○	(86)
八五	なをし	ヒタゝレ	×	×	(86)
八六	これは世の	世ノ	○	○	(88)
八七	きゝをける	キケル／かきをける	○	○	(89)
八七	世中の	世中	×	○	(89)
八八	うきたつて	ウキタチテ	×	×	(89)
八八	うれい	ウレヘ	×	×	(90)

「用る人」

八九 冬十一月廿六日

冬

×

○
(91)

九三 ふかれ

フキテモ／ふきて

×

×

九三 とほしき

トモシキ

×

×

九四 時には

時ハ

×

×

九四 まぬかれてし

ユルサレキ

×

×

九五 よつて

ヨリテ

×

×

九六 かや

昔

×

×

九七 二とせの間

二年カアヒタ

×

○
(98)

九八 秋冬の

秋／秋冬

×

○
(100)

一〇〇 うゆる

ウフル

×

×

一〇〇 義なし

ソメキハナシ／そめきなし

×

×

一〇一 よつて

よりて

△

(嗟天正)

×

一〇一 捨

ステ、／忘れて

×

×

一〇一 さかひをいてゝ

サカヒヲイテ

×

×

一〇二 忘

ワスレテ

×

×

一〇二 はしまり

ハシマリテ

○

○
(104)

一〇五 なへて

たへて

×

○
(106)

一〇六 わひつる

ワヒツ、／わひて

×

×

一〇七	ことくに	事ク／ことく	×	×	108
一〇八	かはる	カフル	×	○	109
一一〇	くれ	クレヌ／暮ヌ	×	×	111
一一〇	あくるとし <small>寿永元壬寅年</small>	アクルトシ	×	×	112
一一〇	たてなをる	タチナヲルヘキ	×	×	112
一一一	あまつさへ	アマリサヘ／あまさへ	×	○	112
一一一	うちそひ	ウチソヒテ	×	×	112
一一一	すくれさまに	マサ、マニ／まさるさまに	×	×	113
一一四	引つゝみて	ヒキツゝミ	×	○	115
一一四	ひたそらに	ヒタスラニ／ひたすら	×	×	116
一一五	こひゆく	家コトニコヒアリク	×	×	116
一一六	ふす	フシヌ／ふし又	×	×	118
一一七	死たる	シヌル	×	×	118
一一七	たくひ	物ノタクヒ／者のたくひ	○	○	118
一一七	なけねは <small>(れが)</small>	シラネハ	△	○	119
一一八	みち／たり	ミチ満テ	×	×	120
一一九	あてられす	アテラレヌコトヲホカリ	×	○	120
一二九	溝や	イハムヤ／況や	×	×	121

「なけねは」

一三二	なくなり	ナキ人ハ	×	×	123
一二二	こほつて	コホチテ	×	×	123
一二三	もたる	モチテイテタル／もて出ぬる	×	○	124
一二三	こゝにあやしき事は	アヤシキ事ハ	×	○	125
一二四	丹	ニツキハク	×	×	125
一二四	処々に	ナト所くニ	○	○	126
一二四	つきてみゆる	ミユル	○	○	126
一二五	木あまた有て	木	×	×	126
一二五	せんかたなき	スヘキカタナキ	×	○	127
一二六	わりとつて	ヤフリトリテ／破り取て	×	×	128
一二七	わりくせる	ワリクタケル／わりてくたける	×	×	128
一二七	濁悪の世に	濁悪世ニシモ	×	×	129
一二八	さりかたく	サリカタキ	×	×	130
一二九	者	物ハ／者は	×	×	131
一三〇	死しぬ	死ヌ	×	×	132
一三一	ゆへに	アヒタニ／ほとに	×	×	133
一三一	まれに	マレく／たまく	×	×	133
一三一	よつて	ヨリテ	×	×	134

「持たる」

一三二	親を	ヲヤソノ親に	×	×
一三三	さきには	サキノさきに	×	×
一三三	父母	又ハ、	△	○
一三三	しらす	不知シテノしらすして	×	×
一三四	子か	子ノ	×	○
一三四	ちふさ	チノ乳	○	○
一三五	死する	死ルノ死ぬる	×	○
一三六	みる	ミユル	×	×
一三六	阿字	ヒタイニ阿字	○	○
一三七	せられけるに	セラレケル	×	○
一三九	東まで	東ノ	×	○
一三九	かたはら	ホトリ	×	×
一四〇	死する	シヌル	×	○
一四一	事	物ノ者	×	×
一四一	加へては	クハヘテイハ、	×	×
一四二	際限	際限モ	×	×
一四二	いはんや	イカニイハムヤ	×	×
一四三	ちかくは崇徳院	崇徳院	○	○

(京嵯天正)

一四四	きけとも	キケト	△	○	147
一四五	大地ふるひうこく	ヲホナキフル	×	○	149
一四六	うつめ	ウツミ	×	×	150
一四七	かたふいて	カタフキテ	×	×	151
一四八	やふれて	ワレテ	×	×	152
一四九	たてところ	タチト／たてと	×	×	153
一四九	いはんや都	ミヤコ／都	○	○	153
一四九	あたり	ホトリ	×	○	153
一五〇	在々所々に	在々所々／在々所々の	×	○	154
一五一	たふれ又	タフレヌ	×	×	155
一五一	塵灰とのほつて	チリハヒタチノホリテ	×	×	155
一五二	地うこき	地ノウコキ	△	×	156
一五二	家やふるゝ	家ノヤフルゝ	△	×	156
一五三	みれは	フレハ	×	×	156
一五三	又地	地	○	○	157
一五四	さげやふる	ワレサク／われぬ	×	○	157
一五四	雲に	雲ニモ	○	○	158
一五六、二	おそろしく	ヲヒタ、シク	×	×	167

「裂破る」

一五六	一	二	ふるふ	フル／ふれる	×	○	167	「ふるう」
一五八	事			ナキ	×	×	168	
一五八	ふるはぬ			フラヌ	×	○	169	
一五八	なかりし			ナシ	×	○	169	
一五八	十月			十日	×	×	169	
一五九	四五度			四五度二三度	×	×	170	
一六〇	一度			一度ナト	×	×	170	
一六〇	三月はかり			三月ハカリヤ	×	×	171	
一六一	いたつては			イタリテハ	×	×	172	
一六二	大地ふるいさけて			ヲホナキフリテ	×	○	173	「ふるひ」
一六三	おちなんどす			ヲチナト／落なとして	×	×	174	
一六三	侍なんも			ハヘリケレト	×	×	174	
一六四	いまのたひ			ナヲコノタヒ	×	×	174	
一六四	しかしとそ			シカストソ	×	×	175	
一六四	人皆			スナハチハ人ミナ／則人皆	×	×	175	
一六五	にこり			ニコリモ	×	×	176	
一六六	かさなつて			カサナリ／かさなりて	×	×	176	
一六六	かけても			カケテ	×	×	177	

一六七	世	世中／世の中	○
一六八	したかつて	シタカヒツゝ／したかひて	×
一七二	ことをはゝかり	コトナシ／事かきりなし	×
一七二	つけても	ツケテ	×
一七四	貧にして	マツシクシテ／貧くして	×
一七四	者	家	×
一七四	ゐれは	フルモノハ	×
一七六	僮僕	僮僕ノ	×
一七六	とめる人	福家ノ人／とめる家の人	×
一七七	念に	念々ニ	×
一七八	ゐれは	フレハ	×
一八三	したかはされは	シタカハネハ	×
一八四	いかなる	イツレノ	×
一八四	なにわさ	イカナルワサ	×
一八五	しはらくも	シハシモ	×
一八五	心の	コヽロヲ	×
一九〇	すみか	スマヒ／栖居	○
一九二	義なし	タツキナシ	×

× ○ × ○ × × ○ × × × × × ○ ○ × ○
 202 199 195 195 194 194 193 188 187 186 186 185 184 184 183 182 179 177

「住家」

一九三 あやうからぬにも
 一九七 六十
 一九七 むかへ
 一九九 身
 一九九 付ても
 二〇〇 ふし
 二〇一 消かたきに
 二〇三 をきたるかことし
 二〇四 百分か一にも
 二〇五 よはひ
 二〇五 中々に
 二〇八 ふいて
 二一一 一両
 二二二 今は
 二二三 かくして
 二二八 かはこを三合
 二二〇 そはには
 二二〇 一ちやう

アヤウカラスシモ
 イソチ／五十
 ムカヘテ
 身ニ
 付ケテカ
 フシテ
 キエカタニ／消方に
 老タル
 百分か一ニ／百分か一にたに
 齢ハ／よはひは
 歳／ニ／年々に
 フキテ
 二両
 今
 カクシテノチ
 カハユ三合ヲ
 カタハラニ
 一張ヲタツ

× × × ○ × × × × × × × × × × △
 (京)

× × × ○ ○ × × ○ × × × × ○ × × × × △
 (229) (228) (227) (222) (221) (220) (218) (215) (215) (214) (212) (211) (210) (209) (209) (207) (207) (203)

「ぬにしも」

二二二 かの庵
 二二二 さま
 二二二 もしその
 二二二 やう
 二二三 ためり
 二二四 といふみち
 二二五 しけれとも
 二二五 西は
 二二七 匂ひ
 二二七 こと
 二二八 みち
 二二九 きこえ
 二三〇 たとふへし
 二三〇 うみ
 二三〇 転経
 二三三 ゐれは
 二三五 しら波を
 二三五 あしたに

カリノイホリ
 アリヤウ／ありさま
 ソノ
 所ノサマ／所のやう
 タメタリ
 トイフ
 シケ、レト／しけければ
 西
 ニホフ
 コトニ
 満リ／みてり
 キコユ
 タトヘツヘシ
 物ウク
 読経
 フレハ
 シラナミニコノ身ヲ
 アシタニハ

× × × × × × × × × × ○ × × × × × × × ×
 × × × × × × × × × × ○ △ × × × ○ × ○
 248 248 246 243 243 243 242 241 241 240 238 238 237 236 235 235 234 234

「しけれとも」

二三六	なかめつゝ	ナカメテ	×	○	249
二三六	連情	風情	×	×	249
二三六	かつらの風	モシカツラノカセ	×	×	249
二三七	思やり	ヲモヒヤリテ	×	×	250
二四一	詠して	ヒトリ詠シテ	×	×	254
二四三	ゐる	ヲル／おる	×	×	256
二四三	かれに	カシコニ	×	○	256
二四三	十歳はかりなる小童	コワラハ	×	○	256
二四五	心の	心ヲ	×	×	259
二四六	なくさむ	ナクサムル	×	○	259
二四七	つみ	ツム	×	×	260
二四七	菌林	スソワ	×	×	260
二四七	いたつて	イタリテ	×	×	261
二四八	うらゝなれは	ウラゝカナレハ	×	×	262
二四九	よちのほつて	ミネニヨチノホリテ	×	×	262
二五〇	羽束師	鳥羽ハツカシ	×	×	263
二五一	なくさむに	ナクサムルニ	×	○	264
二五三	笠とり	カサトリヲ	×	×	266

二五四	拝す	ヲカム	×	○	266	〔漸〕
二五四	蟬丸か翁のあと	セミウタノヲキナカアト	×	×	267	
二五五	猿磨大夫	サルマロマウチキミ	△	○	268	
		(マウチキミ)カハカ	(京嵯天正)	×	268	
二五六	(大夫)のはか	シツカナレハ	×	×	271	
二五八	しつかなる時は	ウルホス	×	○	272	
二五九	うるほし	コノハフク／木葉吹	×	×	273	
二六一	木葉を吹	かせきの	×	×	275	
二六三	かせき	チカク	×	○	275	〔近付〕
二六三	ちかつき	ツケテモ	×	×	275	
二六三	つけては	トホサカル	×	×	275	
二六三	さかれる	或ハ	×	○	276	
二六四	ある時は	アハレム	×	×	277	
二六五	かなしむ	景気	×	○	278	
二六六	景気は	コレ	×	○	279	
二六七	これら	ヲモヒシカトモ	○	×	281	
二六九	思ひしかと	ヘタリ／経たり	×	×	281	
二六九	経	ヤ、	×	○	282	
二七〇	やうく		×			

二七三	きこえ	キコユ	×	×
二七五	いかはかりそ	イクソハクソ	×	○
二七五	かりの身	カリノイホリノミ	×	×
二七七	たらずといふ事なし	不足ナシ	×	○
二七八	ちいさきを	チキサキカヒヲ	×	×
二七八	よつて	ヨリテ	×	×
二八〇	われも亦	ワレマタ	×	○
二八二	身のためにのみ	事ノタメニ／身のためには	×	△
二八五	今は	ワレ今／我今	×	×
二八五	人のため	人ノ為ニ／人のために	×	×
二八六	ならば	ナレハ	△	×
二八六	今此世	今ノヨ／今の世	×	×
二八六	友なう人	トモナフヘキ人	×	×
二八八	誰をかやとすへき	タレヲヤトシタレヲカスヘン	×	×
二九二	おもくす	サキトス	○	△
二九二	閑なる事を	シツカナルトヲ	△	×
二九三	奴婢とせん	奴婢トスル／奴婢となす	×	○
二九三	しかし	シカス	×	×

305 (305) (304) (304) 299 (298) (297) (297) (297) (296) (294) (291) (290) (289) (288) (286) (286) (284)

「おもく」
 「のみに」
 「我も又」

二九三	奴婢とせんとならは	奴婢トスルトナラハ	×	○	306
二九四	をのか身	スナハチヲノカ身	×	×	307
二九五	これたゆからす	タユカラス	×	○	307
二九五	かへりみる	人ヲカヘリミル	×	×	308
二九六	くるしといへと	クルシトイヘトモ	×	×	309
二九七	馬車	馬クラ牛車	×	×	309
二九七	似す	シカス	○	○	310
二九八	わかつて	ワカチテ／わけて	×	×	310
二九八	足のか	足ノ、リモノ	×	×	311
二九九	心又身	身心／心身	○	○	311
三〇〇	度々に	タヒ／	×	×	313
三〇一	ゆき	アリキ	×	×	314
三〇二	養性なり	養性ナルヘシ	△	○	314 (兼近京)
三〇二	やすみゐん	ヤスマイヲラン	×	×	315
三〇三	いかんか	イカ、	×	×	316
三〇四	したかひ	シタカヒテ	×	×	317
三〇六	とほしく	トモシケレハ	×	×	319
三〇七	をろそかなれは	ヲロソカナル／をろそかなれとも	×	×	320

三〇七	法味	報ノ喟	×	△	〔猶味〕
三〇七	かやうの事	カヤウノ	○	○	
三〇九	一 今と	今トヲ	×	○	〔322〕
三一〇	心のひとつ	心ヒトツ	×	○	〔327〕
三二三	かへつて	カヘリテ	×	×	〔330〕
三二四	はしる	ハスルノ着する	×	×	〔331〕
三二四	もし	若人ノもし人	×	×	〔331〕
三二五	あらすんは	アラサレハ	×	×	〔332〕
三二六	あらすんは	アラサレハ	×	×	〔333〕
三二七	これにおなし	ヲナシ	×	○	〔334〕
三二七	すますは	スマスシテ	×	△	〔334〕
三二一	いほり	草庵ノ草の庵	×	×	〔338〕
三二一	寂静	閑寂ニ	×	△	〔338〕
三二三	むなしくおしむへき	アタラノむなしくあたら	×	○	〔340〕
三二四	もんして	トヒテノ問て	×	×	〔341〕
三二四	のかれ	ノカレテ	×	○	〔341〕
三二五	ましはれる	マシハル	×	×	〔342〕
三二五	おさめつゝ	ヲサメテ	×	○	〔342〕

三三六	聖に似て	スカタハ聖人ニテ／姿は聖に似て	×	×	「染り」
三三六	そめり	シメリ	×	○	「染り」
三三六	なましいに	スナハチ	×	○	「なましゐに」
三三八	猶	ワツカニ	×	×	
三三八	行にも	行ニタニ／行にたにも	×	×	
三三九	むくひ	報ノ	×	×	
三三九	忘心	妄心	×	×	
三三九	いたつて	イタリテ	×	×	
三三九	狂せるかと	狂セルカ	×	△	「くるわせるかと」
三三〇	其時	ソノトキ心／其時心	×	×	
三三〇	なく	ナシ	×	○	
三三一	やとして	ヤトヒテ	×	×	
三三一	二三返	両三遍／両三返	×	○	
三三二	二年 ^中	フタトセ／二トセ	×	○	「二とせ ^中 」
三三三	庵	イホリニシテ／庵にして／庵にて	×	×	

(本学大学院博士前期課程)

(本学教授)